

Keio  
Research  
Center  
for  
the  
Liberal  
Arts

慶應義塾大学  
教養研究センター

**2017 年度  
活動報告書**

---

# 2017年度 活動報告書

---

慶應義塾大学教養研究センター  
Keio Research Center for the Liberal Arts



# はじめに

慶應義塾大学教養研究センター所長 小菅隼人

2017年度の活動報告書をお届けします。

詳しくは各項目に譲りますが、今年度の特筆すべき新しい活動として、株式会社白寿生科学研究所寄附講座の設置、基盤研究「教養研究会」のスタート、センターパンフレットの改訂が挙げられます。加えて、2018年度に繋がるものとしてさらに新たな寄附講座を設置する準備も整いました。一方、龍角散寄附講座、学生相談室との共催講座など、2017年をもって終了する事業もあり、教養研究センターは新陳代謝を繰り返しながら、確実に成長していると言えます。その成果を本報告書でご確認いただければ幸いです。

2017年4月、新しい塾長が選任されました。その経緯については、いくつかの議論が沸き起こり、教養研究センター所員の間でもいくつかの意見が出たことは記しておかなければなりません。進行中の事業になるべく影響がないように、所長として、何人かの所員との意見交換、あるいは教養研究センターの姿勢の説明・説得にあたったことも事実です。ただし、教養研究センターは、その「議論」があたかもなかったかのように振舞うのではなく、存在する問題には正面から取り組み、考え抜く姿勢を示したいと考えました。それこそ教養の底力だと信じるからです。「生命の教養学」（荒金直人委員長）の次年度企画のテーマを「組織としての生命」として進めたのも、日吉キャンパス公開講座（寺沢和洋委員長）のテーマを「ルールと作法」して連続講義を組んだのもその表れだと言えましょう。これらは2018年度に実施されますので、その成果もいずれお目にかけられることと思います。

しかしそれでも、教養研究センターの依って立つところは、あくまで、人間性の根本にあるものとしての「教養」とその「研究」にあります。世界においても日本においても、私たちの周囲には、様々な政治的問題が渦巻いていますが、自分達の立場と使命をあくまで堅持していきたいと思っています。藤原定家は『明月記』に「世上乱逆追討耳ニ満ツト雖モ、之ヲ注セズ。紅旗征戎吾ガ事ニ非ズ」と記しました。源平争乱の世にあって、「世上のことは吾が事に非ず」と断じる心構えには清々しいものがあります。この言葉を、私は、劇作家の木下順二先生が薩摩守忠度について書いた文章の中で知りました。定家にしても、忠度にしても、木下順二にしても時代の中でもがき苦しんだ人だと思いますが、自分の歩く道をしっかりと見据える姿勢を少しでも見倣いたいと私は思っています。

2018年5月、この文章を準備している最中、教養研究センターを主管されていた鈴木直樹常任理事が亡くなられたというたいへん残念な報に接しました。鈴木理事には、前段で記した議論も含めて教養研究センターで起こっていることは全て報告していました。理事は、私の報告を聞いて下さった上で、対応は所長に任せるけれども、何か力になれることがあったら何でも言ってくださいという言葉をかけて下さいました。理事になられて一年足らずのことでしたので、私たちには勿論、理事ご自身もたいへん心残りだったことと思います。心よりご冥福をお祈りいたします。

教養研究センターの全ての活動はこの報告書に示されています。そして、忘れてはならないのは、それらは、極東証券株式会社様、株式会社龍角散様、株式会社白寿生科学研究所様、鶴岡市、致道博物館など大学外部からの様々なご支援を受けて展開できているという事実です。そのご期待に背くことがないように、我々所員・教職員で精一杯努力する所存ですので、何卒今後ともご指導とご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

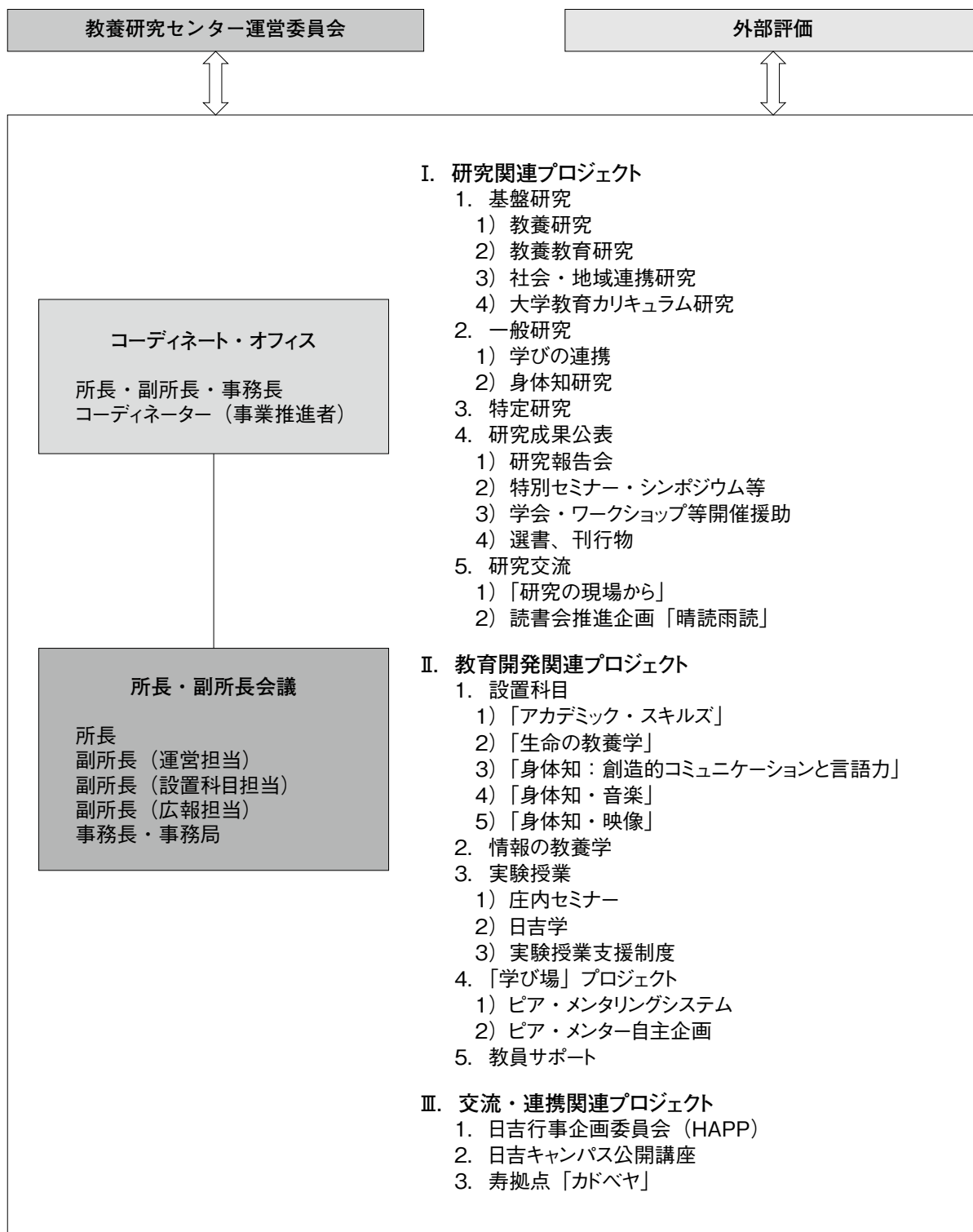


# 目 次

はじめに	03
組織構成と事業計画	06
2017 年度事業報告	07
広報・発信	09
<b>I 研究関連プロジェクト</b>	
<b>基盤研究・一般研究・特定研究</b>	<b>11</b>
<b>研究成果公表</b>	
学会・ワークショップ等開催支援	15
<b>研究交流</b>	
研究の現場から	16
読書会推進企画「晴読雨読」	17
<b>II 教育開発関連プロジェクト</b>	
<b>1 設置科目</b>	
1-1 アカデミック・スキルズ	19
1-2 生命の教養学—「教養」への「感染」—	20
1-3 身体知—創造的コミュニケーションと言語力—	21
1-4 身体知・音楽	22
1-5 身体知・映像	23
<b>2 情報の教養学</b>	<b>24</b>
<b>3 実験授業</b>	
3-1 庄内セミナー	26
3-2 過去から未来を紡ぐ「日吉学」 —キャンパスの古層を探求・体感した縄文編	28
<b>4 「学び場」プロジェクト</b>	<b>30</b>
<b>5 教員サポート</b>	<b>31</b>
<b>III 交流・連携関連プロジェクト</b>	
<b>1 日吉行事企画委員会（HAPP）</b>	<b>32</b>
<b>2 日吉キャンパス公開講座</b>	<b>34</b>
<b>3 居場所「カドベヤで過ごす火曜日」</b>	<b>36</b>
<b>資料編</b>	
<b>1 慶應義塾大学教養研究センター規程</b>	<b>37</b>
<b>2 運営委員会委員</b>	<b>39</b>
<b>3 組織構成員</b>	<b>40</b>
<b>4 2017 年度の主な活動記録</b>	<b>42</b>

※ I～IIIの分類は機能カテゴリーであり、センター内部の組織ではありません。1つのプロジェクトが複数のカテゴリーに属することはありますが、本報告書では、便宜上各プロジェクトを3つのカテゴリーのいずれかにまとめました。

## 教養研究センター組織構成と事業計画（2017年度）



コーディネート・オフィスは、運営委員会の付託を受けて教養研究センターの日常的な活動を執行する機関です。約 20 名のコーディネーターから構成されています。所長・副所長・事務スタッフに加え、教養研究センターの極めて多彩なプログラムを統括する代表や中心メンバー、学部や関連研究所からのメンバーが加わっています。教職一体での運営というのが教養研究センター設立からの理念ですが、これを実行しているのがコーディネート・オフィスです。

詳しい報告は各項目に譲るとして、ここでは、当初計画による形式上の分類に捉われず、内容から全体を概観して、研究活動、設置科目、啓蒙サポート活動、地域連携活動、その他として概要を述べる。

## 1. 研究活動について

- A) 2017年度も前年度同様「大学教育カリキュラム研究」については特段の研究活動はない。しかし、日吉のカリキュラム作成において大きな改革ポイントとなった日吉カリキュラム検討委員会の設置は、教養研究センターの基盤研究の一つの成果であり、大学における教養とカリキュラムの関係の重要性に鑑みて、今後も教養研究センターの事業として設置する予定である。経済学部のPEARLやGICが進む中、今後、グローバル化とカリキュラムの関係を集中的に考えなければならない時期が来ることが予想される。
- B) 2015年度からの念願であった「教養研究会」の具体化を目指して企画立案を進めた結果、2017年度は新たに各学期1回(年2回)の研究講演会、年1回のシンポジウムを開催することができた。当初の計画通り、各回PDFにおいて内容をネット公開し、二年に一度冊子体として公刊するつもりで、記録を準備した。古来、「教養」は常に「教育」と結びついてきた。その意味で、教養「教育」は、実践的な教養「研究」の出発点であり到達点であると言ってもいい。この点を踏まえ、現在の教養研究センターは、多彩でユニークな教育活動の創造・展開に大きな重点が置かれているが、それと同時に、所謂「教養」という概念を明確化する学問的研究活動が必要という認識は今後も堅持するつもりである。

## 2. 設置科目について

- A) 「アカデミック・スキルズ」：教養研究センターの教育活動の中で、最も大きな位置を占める「アカデミック・スキルズ」は、前年度同様、「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」が開講された。また、学生主体の「プレゼンテーション・コンペティション」と「論文コンペティション」も実施され、さらにこの授業の充実化がはかられた。ただし、「アカデミック・スキルズ(英語)Ⅰ・Ⅱ」については、受講者に減少傾向がみられ今後の検討課題とすることが確認された。
- B) 「生命の教養学」：「感染」を2017年度のテーマに、オムニバス講義が行われた。過去最高100以

上の受講者によって、生命の営みを教養という観点から再検討する講座となった。2016年度に引き続き、日吉メディアセンターの協力のもとに、この講座の中で、新入生を対象として「情報リテラシーセミナー」を行った。

- C) 「身体知」：2017年度は、横山千晶教授を担当講師として、集中講義として実施された。非現実的設定でありながら現実感のある藤枝静男とジョー・ミノの作品を題材として、言葉の音楽的響きと身体理解を取り入れることで、座学と身体の両面から学ぶ試みであった。横山教授の綿密な講義設計によって、通信教育課程生と通学生が共に学ぶ貴重な機会ともなった。
- D) 「身体知・音楽」：「身体知・音楽Ⅰ・Ⅱ」は、教養教育の一環として音楽芸術の良き理解者を、未来社会に派遣するということを目指している。住友生命寄附講座が当初予定の通り2016年度をもって終了したため、2017年度は、極東証券寄附講座、龍角散寄附講座としての運営となった。音楽大学以外で、実践をも含めたこれ程充実した音楽教育を行っている大学は他に無いのではないかと自負している。音楽を通して教養教育のさらなる展開が期待される。
- E) 「身体知・映像」：相変わらず、学生たちの映像リテラシーに寄せる関心の高さをうかがわせた。佐藤元状、横山千晶担当講師のもとで同じ文学作品をふたつのグループで映像化する試みによって、集団制作の技術をも学ぶことができた。川上弘美の短編集を通して二つの短編映画が製作され、上映会もおこなった。

## 3. 啓蒙・サポート活動について

- A) 「日吉キャンパス公開講座」：慶應義塾の知を広く社会に公開する、日吉における代表的活動としてこの講座がある。主として一般を対象とした有料の公開講座である。2017年度は、山下一夫准教授を中心に「観光と開発」をテーマとして、10月から12月まで8週、計16名の講演を行った。日程の入れ替えなどはあったが、概して順調に進み、前年同様多くの申込を受け、このテーマに対する関心の高さを伺わせた。
- B) 「情報の教養学」：主として学生を対象として、教職員・一般にも開いた講座である。2017年度は「情報の光と影」をテーマとして、講演会を6回実施した。各回とも聴衆が熱心に講演者の話を聞き、質疑討論も活発に行われた。特に



「初音ミクの影響力」の回への学生の感心の高さは、今後のテーマ選定のヒントとなった。ほとんどの講演はYouTube上で公開されている。

- C) 「教員サポート講演会」：教員を対象とした啓蒙活動である。本年度も、日吉学生部（学生相談室）との共催で、大岡真希子氏（カウンセラー）、中村麻里子氏による「学生相談室事始め—学生理解と一次対応のために」と題した講演が行われた。綿密な準備と広い経験に基づく充実した内容であったが、受講者数の点で、時期等の工夫に課題を残した。所長、担当副所長が関係部署との協議を重ね今後在りうべき形を模索することになった。
- D) 「学習相談」：本年度も、日吉メディアセンターとの共催で行われた。学生を対象として、日吉メディアセンターと共同で行われているこの事業は、学生が自ら教えることで学ぶ「半学半教」の精神に基づき、教職員のサポートによって学生主体で行われている。慶應独自の学びの形を実践する事業として、また、「教養の方法」を模索する企画として、意義あるものと考えている。
- E) 「研究の現場から」[学会・ワークショップ支援]：教養研究センターは、教職員を対象として、日吉キャンパスでの研究教育活動を活性化する様々な支援活動を行っている。これは、当センターが支援することで所謂「ハブ」となって教職員を繋ぎ、教養の基礎概念である「多様性」のあり方を実現・模索するための試みである。詳しくは本文に譲るが、今後も継続させたい事業であると考えている。
- F) 「読書会」：2017年度は、工藤多香子准教授を中心に、前年度からの読書会推進企画「晴読雨読」の第2弾が実施され、ブルーノ・ラトゥールの『科学論の实在』が読了された。また、教養研究センターからの提案により、片山杜秀教授によって『懺悔道としての哲学』が開始された。これはいずれも、日吉キャンパスにおける読書会開催を促進することで教員の研究交流の機会を増やすとともに、学生を含めた日吉キャンパス全体の読書習慣の活性化をはかる、教員支援プログラムである。さらなる活性化が期待される事業である。

#### 4. 地域連携活動について

- A) 「庄内セミナー」：教養研究センターでは山形県鶴岡市にある慶應義塾鶴岡タウンキャンパスを拠点として2008年以来、庄内セミナーを開催してきた。2014年度に未来先導基金としての活動が

終了し、2015年度からは、新たに経常予算を計上して実施された。この事業では、地域と大学が一体になって学生を教育し、新たな教育方法として一つのモデルとなることが期待されるが、その意味では、単なる地域連携・交流活動ではなく、また単なる教育活動の枠にとどまらず、教養研究活動として位置付けられると考えている。2017年度、大出敦教授を実行委員長として開催され、急病の学生は出たものの、スタッフが適切に対応して、全員揃って全行程を終えた。終了後、活動報告書が作成され、関係各所に配布された。

- B) 「日吉学」：2013年開始した「日吉学」は、講義とフィールドワーク、グループディスカッションによって知識を体験と結び付け日吉の自然、地理、歴史を総合的に学ぼうという試みである。「日吉学」は実験授業に位置付けられ、授業形式・参加学生の年齢構成・教授陣の多様性に特徴がある。その後も活動は続けられたが、新たな整理と展開の為、不破有理教授を中心に、2016年度春学期に検討委員会を持ち、2016年度秋より設置授業化を目指して再開された。2017年度は設置講座の準備年として継続し、幸いにも寄附の申し出をいただき、2019年度より設置科目化の目途がたった。2018年はその具体的な手続きを進める予定である。
- C) 日吉行事企画委員会（HAPP）：2017年度、前年の形式を引き継ぎ、新たな内容で展開された。1990年代にはじまった入学歓迎行事は、日吉の各教員、職員、学生を繋ぎ、学部教育からこぼれ落ちた知を結びつける活動の受け皿として、その後、日吉行事企画委員会となり、今日の教養研究センターの一つのルーツとなった。具体的には、春学期は主に新入生歓迎行事、秋学期は公募企画行事を行っている。
- D) 「カドベヤ」：2010年4月にコトラボ合同会社と慶應義塾大学により共同で設立されたオルタナティブスペース「カドベヤ」も継続中の重要な地域連携活動である。前年同様、「居場所『カドベヤで過ごす火曜日』」が行われた。「日吉学」同様、新たなコミュニティの創出という意味で、単なる地域連携・交流活動ではなく、また教育活動の枠にとどまらず、教養研究活動として位置付けられると考えている。

（小菅隼人）

教養研究センターでは、様々な活動の広報に努め、センターの意義を常に発信している。講演会や公開講座などはポスター、チラシによって告知するとともに、ウェブページを活用して最新情報を随時発信し、研究・教育活動の周知を行っている。

また、慶應義塾大学出版会と連携し、活動成果を公開する書籍などの出版にも力を入れている。2017年度の刊行物は以下の通りである。

## 1. 教養研究センターパンフレット

■ 2017年5月31日刊行

センターを総合的に紹介するパンフレット。7年ぶりに改訂した。

## 2. Newsletter (ニューズレター)

■ 30号 2017年5月16日刊行

■ 31号 2017年11月30日刊行

日吉所属教職員とセンター所員を対象とした広報の一環として、Newsletterを年2回刊行している。

## 3. CLA アーカイブズ

■ CLA アーカイブズ 34

『教員サポート19「学生相談 事始め—学生理解と一次対応のために—」』 2017年10月31日刊行

■ CLA アーカイブズ 35

『学びの連携プロジェクト公開セミナー 効果的な論文指導を目指して—日本語論文編/英語論文編』 2018年3月31日刊行

センターで行っている教職員を対象としたサポートワークショップの内容をアーカイブとして刊行している。

## 4. 極東証券寄附講座

### 【生命の教養学】

■ 赤江雄一編『生命の教養学12 食べる』 2017年7月31日刊行

オムニバス講義「生命の教養学」は、講座の内容を書籍にまとめて出版している。本年度は2015年度の講座について出版した。

### 【アカデミック・スキルズ】

■ 『2017年度「アカデミック・スキルズ」学生論文集』 2018年3月31日刊行

センターの看板科目である少人数制授業「アカデミック・スキルズ」では、一年かけて学生が論文を

完成させる。これを学生自身が編集し、論文集として2004年度より毎年刊行している。

## 5. 報告書

■ 『教養研究センター 2016年度活動報告書』 2017年8月31日刊行

■ 『2017年度 第8回「庄内セミナー」報告書』 2017年11月30日刊行

■ 『教養研究センター主催読書会「晴読雨読」報告書:エマニュエル・レヴィナス著『倫理と無限 フィリップ・ネモとの対話』を読む』 2018年3月31日刊行

## 6. 教養研究センター選書

■ 横山千晶『教養研究センター選書18 ジョン・ラスキンの労働者教育—「見る力」の美学』 2018年3月31日刊行

センターでは、研究の前線を一般にもわかりやすい形で紹介することを趣旨として選書を刊行している。原稿は毎年所員から募集し、選考を経て刊行を決定している。2017年度は1作が刊行された。

(高橋宣也)

## 2017年度教養研究センター 刊行物一覧



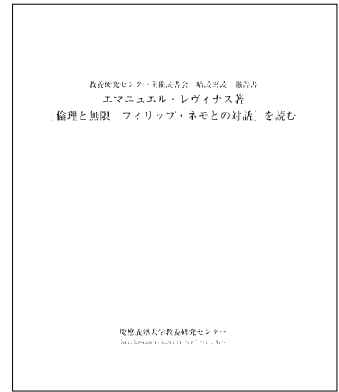
教養研究センターパンフレット  
(2017.5.31 刊行)



教養研究センター選書  
(2018.3.31 刊行)



極東証券寄附講座  
生命の教養学12『食べる』  
(2017.7.31 刊行)



晴読雨読報告書  
(2018.3.31 刊行)



CLA アーカイブズ 34  
(2017.10.31 刊行)



CLA アーカイブズ 35  
(2018.3.31 刊行)



2017年度  
アカデミック・スキルズ学生論文集  
(2018.3.31 刊行)



2016年度活動報告書  
(2017.8.31 刊行)



News Letter 30号  
(2017.5.16 刊行)



News Letter 31号  
(2017.11.30 刊行)



2017年度「庄内セミナー」報告書  
(2017.11.30 刊行)

## 基盤研究・一般研究・ 特定研究

### 基盤研究

2017年度、「大学教育カリキュラム研究」「社会・地域連携研究」については特段の研究活動はない。しかし、教育と連携を中心とした研究活動は、社会の情勢を見ながら必要になった時に直ぐに立ち上げられるように常に枠組みを維持しておくことが重要だと考えている。特に、日吉のカリキュラム改革において大きな改善点となった日吉カリキュラム検討委員会の設置は、教養研究センターの基盤研究の一つの成果とも言え、大学における教養とカリキュラムの関係の重要性に鑑みて、今後も教養研究センターの事業として維持する予定である。経済学部のPEARLやGICが進む中、今後、グローバル化とカリキュラムの関係を集中的に考えなければならない時期が来ることが予想される。また、「社会・地域連携研究」についても、2018年度、「カドベヤ」の廃止を前提に再検討がされつつあり、また、2019年度からの「日吉学」設置科目化が決定している状況の中で、新たな研究の枠組みでの社会・地域連携

を考える必要がある。基盤研究のもう一つの、そして中心的な柱である「教養研究」については、研究講演会が2本、シンポジウムが1本行われた(後述)。

### 一般研究

2016年度の続編として、大野真澄君(法学部専任講師)により、「学びの連携」プロジェクト公開セミナー「効果的な論文指導を目指して—英語論文編」が行われ、学生、教員、職員を含めて有益な討論が行われた。このセミナーについてはアーカイブされている。また、例年通り、申請のあった研究活動に対して、研究オフィス運営協議会の承認を経て、来往舎2階のプロジェクト研究室(204室、205室)とプロジェクト研究員室(202室)を、研究オフィスとして提供した。

### 特定研究

2017年度、この項目について特段の活動は行われなかった。

### 2017年度・プロジェクト研究員室(202室)利用申請一覧

研究代表者	研究テーマ	利用者氏名・所属	備考
小原京子・理工学部教授	意味フレームに基づく意味タグ付きテキストコーパスの構築	ピエール, リディア (IMT Atlantique, France・インターン生)	2017/4/1～ 2018/3/31
木島伸彦・商学部准教授	英語学習とパーソナリティ尺度及びその言語脳神経科学的考察	水澤祐美子 (理工学部講師(非常勤))	2017/4/1～ 2018/3/31
鈴木晃仁・経済学部教授	日本に於ける放射線医療の歴史を調査	盧詩霖 (社会学研究科准訪問研究員)	2017/4/1～ 2017/8/20
鈴木晃仁・経済学部教授	近世の家と病:医療の文化史の研究のため	ヤング, ウィリアム, エヴァン (社会学研究科訪問講師)	2017/4/1～ 2017/8/20
鈴木晃仁・経済学部教授	日本における精神病床入院メカニズムの実証研究	後藤基行 (社会学研究科訪問研究員)	2017/4/1～ 2018/3/31
鈴木晃仁・経済学部教授	精神医療の資料整理及び目録作成	清水ふさ子(社会学研究科研究員(非常勤))	2017/6/1～ 2018/3/31

### 2017年度・プロジェクト研究室(204室・205室)利用申請一覧

研究代表者	研究テーマ	部屋番号
小原京子・理工学部教授	意味フレームに基づく意味タグ付きテキストコーパスの構築	204
森吉直子・商学部教授	Corporate Visual Identity に対する消費者反応に関する国際比較研究	204
津田真弓・経済学部教授	日本学教育の国際化に関する研究	205
阿久沢武史・慶應義塾高等学校教諭	地域と連携した日吉地区の戦争遺跡の研究と教育的活用	205

### 基盤研究・「教養研究」

以下のコンセプトに基づいて、春学期に西村太良本学名誉教授、秋学期に毛利三彌成城大学名誉教授により研究講演会が開かれた。さらに秋学期には、片山杜秀副所長のコーディネートによるシンポジウムが行われた。これらの研究会とシンポジウムは、PDF化され教養研究センターホームページにおいて公開されており、さらに、2年に一度冊子化して広く成果を公開する方針である。

【目的】「文化」、「古典」、「成熟」…といった言葉を足掛かりに、「教養」を定義しようとする試みはこれまで多く行われてきた。しかし、それらは、「教養」を一つの側面から見た性格を経験的、直感的に捉えたものに過ぎない。「教養」は人間にとって絶対的に必要なものでありながら、いまだその形式も機能も目的も性格も明確に定義されておらず、そうであれば、研究機関としての教養研究センターの最大の目的は、「教養とは何か?」「教養はどのような役割を果たしてきたのか?」「教養は何のために必要か?」という疑問に明確な答えを与えられるだけの研究を行うことだと考える。この方針に基づいて、2016年度を準備期間として、2017年度春学期より、基盤研究としての「教養研究」を開始した。

【方法】「教養とは何か?」「教養はどのような役割を果たしてきたのか?」「教養は何のために必要か?」という問いに対して、演繹的な方法によらず、歴史、地域、対象を区切って、知識を積み上げ、それらを統合する形で、答えを模索していく方針である。多様な知の集合体である慶應義塾大学の研究力をもってすれば、例えば、古典古代、チューダ朝英国、江戸時代の武家階級…における教養の形や役割を積み上げていくことは、十分に実現性があり、また、大学生にとって必要な教養、研究者にとって必要な教養、慶應義塾生にとって必要な教養という区切り方も出来るはずである。その中に共通項があるという作業仮設のもとに、研究講演会とシンポジウムを積み上げて、折に触れて統合的に振り返る方法を採用。

【講演会 no.1】西村太良名誉教授「オイディプス王を上演する」

研究会の第1回は「研究講演会」と位置付け、2017年5月10日(水)18時15分より、西村太良名誉

教授に講演を依頼し、来往舎シンポジウムスペースで行われた。西村先生は、西洋古典学、古代ギリシア抒情詩・悲劇、現代ギリシア語を専門領域とされ、また、日吉主任、文学部長、常任理事として特に日吉の教養教育に深く携わった経験を持っている。当日、先生は、数年前に日吉でおこなった「オイディプス王を上演する」という授業を例に、ギリシア・ローマ文学と現在の大学生の接点をどこに求め、古典をどのように受容していくかという問題について講演をされた。紀元前427年頃に制作されたとされる『オイディプス王』は、古典中の古典として現在でも広く読まれているが、それが現代の学生の心の中に深く印象付けられるためには、学生自らがその世界を「体験」しなければならない。そのためには、古典古代の世界に自らを投げ入れ、『オイディプス王』の時代と場所に戻って体験する方法と、逆に『オイディプス王』の物語と台詞内容を現代に引き寄せ、自らが現実に直面している問題に翻訳して体験する方法があるが、西村先生の講演は、特に学生がオイディプスの問題を自らの問題に引き寄せ、それによって自らの教養として消化していく方法を示してくれた。当日は、古代ギリシアのデュオニソス劇場風の半円形に机を配置し、小菅隼人の司会によって約30名の参加者を得て開催された。1時間の講演の後、30分の質疑応答の中で、西村先生は、伝説的なプロジェクトである東大ギリシャ悲劇研究会(ギリ研;1958年開始)と恩師久保正彰先生にも触れ、自らのギリシア古典体験も語った。聴衆には、かつて日吉での演劇教育に尽力された楠原偕子名誉教授、また、ギリ研にも深くかかわった毛利三彌元日本演劇学会会長も来場されて、有意義な議論が行われた。

【講演会 no.2】毛利三彌「教養と演劇:現代人にとって演劇は教養になるか」

第2回目の研究講演会は、2017年12月12日(火)18時15分より行われた。講師は、元日本演劇学会会長・成城大学名誉教授の毛利三彌先生、司会は小菅隼人が務めた。講演は、まず、外来概念であった「教養」のイメージの変遷を確認することから始まった。すなわち、積極的な意味を持っていた「教養」は、1960年代から70年代にかけての大学紛争時に急激に肯定的な意味を失い、ついには1991年の大学設置基準大綱化によって、少なくとも大学教

育においては必須ではなくなる。これは、1960年代、西洋演劇の移入で始まった「新劇」の教養主義的なあり方を批判した「アングラ演劇」が台頭してきた時期でもあった。そして、昨今、またも「教養」が積極的な意味を持つようになったのと軌を一にして、かつてアングラ演劇で暴れていた俳優たちは、いまやTVや舞台の中心的なスターとして、多大の人気を得るようになったという現象が起こっている。そのような「教養」の揺れのなかで、近代日本の「教養」はヨーロッパ起源の外来概念であり、その根底にはギリシャ演劇の起源となった「議論」があったことを確認すべきと毛利先生は強調した。公共広場であるアゴラあるいはフォルムにおいて自分の意見を闘わせる、それは喧嘩口論とは異なり、情報の確認や価値観の交換であり、日常生活における対立には発展させない作法としての「議論」なのである。その「議論」が基本的に対話形式をとる西洋ドラマの根底にあり、この習慣が基本的には日本にはなかったし、今でも日本人には身につけていないと毛利先生は主張した。かつて著書の中で、毛利先生は川島武宜『日本人の法意識』（岩波新書）を引きつつ、河竹黙阿弥『三人吉三』に見られる日本人の仲裁的調停による紛争解決と西洋ドラマに見られる議論との差について言及されたが、確かに、大学のゼミナール、あるいは教授会においてさえ、対立はあって「議論」は殆ど見受けられないのが実態なのである。本講演において、議論する技術を身につけることが今後の大学教育にとって必須であるという確信が得られことが大きな収穫であった。講演後の質疑応答では活発な意見交換が行われ、「教養」の本質論としても、教育論としても非常に示唆的、刺激的な研究会となった。当日は、学生を含めて約20名の出席者があった。

(小菅隼人)

教養研究センター基盤研究 講演会 No.1

## 「オイディプス王」を上演する —古典と教養

西村 太良 慶應義塾大学 名誉教授

5月10日(水) 18:15 ~ 20:00



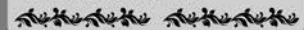
主催：慶應義塾大学 教養研究センター お問合せ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

来往舎 1F シンポジウムスペース

対象：研究者、塾教職員、  
関心のある学部生・大学院生

予約不要・入場無料

ギリシア・ローマの古典は西欧の文化の基盤として今日に至るまで教養教育の中核となってきました。しかし、日本の大学教育の中における古典の位置づけはどうなっているのでしょうか。今回は数年前に日言で行なった「オイディプス王」を上演する」という授業の例をご紹介します。ギリシア・ローマの文学や哲学、歴史など、今の大学生との接点をどこに求めることができるのか、またそれがどのように教養教育と結び付くのか考えてみたいと思います。



教養研究センター基盤研究 講演会 no.2

## 「教養と演劇： 現代人にとって、 演劇は教養になるか」

12月12日(火) 18:15 ~ 19:45

日吉キャンパス来往舎 1F シンポジウムスペース

予約不要・入場無料 / 対象：研究者、塾教職員、  
関心のある学部生・大学院生



毛利 三彌 (もり みつや)

名城大学名誉教授、文学博士  
ノムウェー学士協会、元日本演劇学会会長、東京大学文学部美術史学科卒業、  
カリフォルニア大学 (L.A校) 演劇学大学院M.A.修了。  
上著書：『北條演劇論』、『イブセンのリアリズム』(日本演劇学会刊行賞)。  
『イブセンの異議』、『演劇の詩学—新上演の構造分析』  
主編書：『東西演劇の比較』、『演劇論の史観』、『北條の舞台芸術』  
主著書：『北條文学史』(共訳)、『イブセン戯曲選集—現代劇全作品』(編訳者) 著  
主な演出：イブセン現代劇連続上演

主催：慶應義塾大学 教養研究センター お問合せ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp



【シンポジウム no.1】「日本の近現代を“教養”から考える」

基盤研究として始められた「教養研究」ではシンポジウムを積み重ねてゆくことを予定している。その第1回として2017年10月28日の13時から16時半まで日吉キャンパス独立館のDB201番教室に於いて「日本の近現代を“教養”から考える」を開催した。全体は2つの講演と鼎談で構成された。

第1の講演は、帝京大学文学部教授で東京財団上席研究員の筒井清忠氏による『近現代日本の教養を見る視座』。筒井氏は近代日本で通用してきた教養の概念を3つに分類した。一つ目は、大学で専門教育と教養教育というときの教養、すなわち専門人形成の前提となる常識人に求められる教養である。二つ目は、「教養がある」というときの教養、すなわち物知りという意味での教養である。三つ目は、「教養人」というときの教養、倫理道徳まで含んだ総合的人格の完成に不可欠な教養である。筒井氏は教養の華は三つ目にあると考える。だが、三つ目の教養は価値相対主義の蔓延や過情報化した現代社会の中で危機を迎えており、それを克服することは困難であるとはいえ、古代から人格の完成に欠かせないと思われてきた「古典」を読む体験の重みを取り戻すことが重要であるというところで結ばれた。

第2の講演は、京都大学と関西大学の名誉教授で関西大学東京センター長の竹内洋氏による『「知者」の教養と「治者」の教養』。竹内氏は学者・知識人たる知者と政治家や経済人たる「治者」の日本近代における関係史を考察した。氏によれば両者は、明治から敗戦直後のエリート教育の時代には親和性が高かった。知者は治に関心があり、治者は知に敬意を払い、その取り込みに努めていた。知者は政治・社会に対して発言し、治者は「古典」の学習をステータス・シンボルとした。ところが戦後社会で大衆化が進むにつれ、両者は乖離していった。そして今ではついに治者に「反知性主義」的の徴候さえあらわれ、知者と治者はほとんど憎しみ合うようになっている。竹内氏は近代日本史を転落史として語った。

以上、二つの講演を踏まえ、最後に筒井氏と竹内氏、および本催事のコーディネーターの教養研究センター副所長、片山杜秀が鼎談を行い、筒井氏と竹内氏の問題関心の近しさが確認されて結んだ。

(片山杜秀)

教養研究センター「基盤研究」教養研究」シンポジウム no.1  
主催：慶應義塾大学教養研究センター

明治・大正の学生文化から戦後の「大衆教養主義」まで  
「教養」は近代日本に何をもちたらし、何をもちたならなかったのか

『日本の近現代を“教養”から考える』  
竹内洋氏（京都大学名誉教授・関西大学東京センター長）

『知者の教養と治者の教養』  
筒井清忠氏（帝京大学文学部教授・東京財団上席研究員）

『近現代日本の教養を見る視座』  
筒井清忠氏（帝京大学文学部教授・東京財団上席研究員）

日時 2017年10月28日(土) 13:00~16:30 (12:30 開場)  
場所 日吉キャンパス独立館 DB201番教室 (日吉駅徒歩2分)  
対象 教職員・学生・一般  
参加費無料・申込不要

問合せ先：教養研究センター事務局（日吉キャンパス本館5階）  
045-566-1151(直通) 内線 33001・33016 toiwase-lib@adst.keio.ac.jp http://lib-wts.hc.keio.ac.jp/  
\*天災・交通事情など予期せぬ事態により変更・中止となる場合は、上記webサイトでお知らせしますので、事前にご確認ください。

〈シンポジウム DM チラシ〉

中央公論 評日 哲學評論  
知性 理論  
思想  
現代思潮  
造改 世界  
生活と文学 新劇  
レコード文化  
秋香藝文  
音楽  
小説  
世界小説  
中央公論  
思想  
現代思潮

教養研究センター「基盤研究」教養研究」シンポジウム no.1  
主催：慶應義塾大学教養研究センター

明治・大正の学生文化から戦後の「大衆教養主義」まで  
「教養」は近代日本に何をもちたらし、何をもちたならなかったのか

『日本の近現代を“教養”から考える』  
竹内洋氏（京都大学名誉教授・関西大学東京センター長）

『知者の教養と治者の教養』  
筒井清忠氏（帝京大学文学部教授・東京財団上席研究員）

『近現代日本の教養を見る視座』  
筒井清忠氏（帝京大学文学部教授・東京財団上席研究員）

日時 2017年10月28日(土) 13:00~16:30 (12:30 開場)  
場所 日吉キャンパス独立館 DB201番教室 (日吉駅徒歩2分)  
対象 教職員・学生・一般 参加費：無料 申込：不要  
\*天災・交通事情など予期せぬ事態により変更・中止となる場合は、上記webサイトでお知らせしますので、事前にご確認ください。

045-566-1151(直通) 内線 33001・33016  
toiwase-lib@adst.keio.ac.jp  
http://lib-wts.hc.keio.ac.jp/

筒井清忠氏 竹内洋氏 片山杜秀

〈シンポジウムポスター〉

I 研究関連プロジェクト

# 研究成果公表 学会・ワークショップ等 開催支援

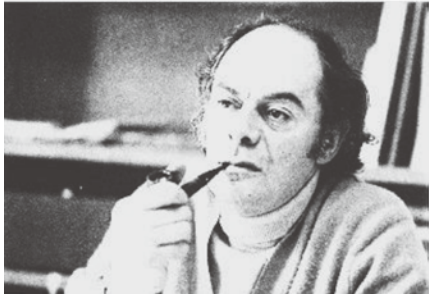
教養研究センターでは、所員が研究会・ワークショップ等を企画する場合、支援、奨励を行うことで所員の研究・教育の活性化を図っている。

所員による創造的な企画や意欲的な挑戦を奨励し促進することを趣旨としており、2017年度は以下の7件が採択となった。

(小菅隼人)

## 2017年度 学会・ワークショップ等開催支援一覧

申請者	会合名	開催日	場所	参加人数
常山菜穂子 (法学部)	日本演劇学会 2017 年度大会	2017 年 6 月 3 日、 4 日	来往舎 J11 藤原洋記念ホール	塾内 30 名 塾外 150 名
渡名喜庸哲 (商学部)	全体主義と民主主義 クロード・ルフォール『民主主義の発明 全体主義の限界』邦訳出版記念シンポジ ウム	2017 年 7 月 8 日	来往舎 日吉キャンパス第 4 校 舎 2 階 D204	塾内 10 名 塾外 32 名
太田 弘 (普通部)	日本地図学会 学術大会 地図学 アウト リーチ ワークショップ	2017 年 8 月 10 日	来往舎 シンポジウムスペース	塾内 25 名 塾外 9 名
高桑 和巳 (理工学部)	デリダと死刑を考える	2017 年 10 月 7 日	来往舎 2 階 大会議室	塾内約 10 名 塾外約 70 名
福田 桃子 (経済学部)	ジュール・ヴェルヌ再発見—作家と大 衆作家	2017 年 10 月 22 日	来往舎 シンポジウムスペース	塾内 5 名 塾外 35 名
横山 千晶 (法学部)	多様な人々をつなぐコミュニティとア ート—シンポジウム&ワークショップ	2017 年 11 月 29 日	来往舎 シンポジウムスペース	塾内 4 名 塾外 26 名
光田 達矢 (経済学部)	ヒトと動物の関係学会 24 回学術大会	2018 年 3 月 3 日、 4 日	来往舎 シンポジウムスペース 中会議室	塾内 10 名 塾外 150 名



フランスにおける「政治哲学の復興」の立役者クロード・ルフォールの  
主著『民主主義の発明：全体主義の限界』のはじめての訳書公刊を記念  
し、その現代的意義を「全体主義」と「民主主義」というルフォールの  
二つの鍵語とともに考える。

日時：2017年7月8日(土) 15時00分～18時00分  
場所：慶應義塾大学日吉キャンパス 第4校舎2階D204教室

第1部 訳者による著作紹介 (15:00-15:55)  
渡名喜庸哲(慶應義塾大学)  
太田悠介(一橋大学)  
平田庸(南山大学)  
赤羽悠(東京大学)

第2部 特定コメント (16:00-17:00)  
山本圭(立命館大学)  
宇城輝人(関西大学)  
佐藤高幸(筑波大学)

第3部 全体討議 (17:00-18:00)

入場無料・予約不要

主催：慶應義塾大学現代フランス思想研究会  
後援：慶應義塾大学教養研究センター  
お問い合わせ：渡名喜庸哲(慶應義塾大学: toshiki@jeru.jp)

**全体主義と民主主義**  
**クロード・ルフォール『民主主義の発明 全体主義の限界』**  
**邦訳出版記念シンポジウム**

A la redécouverte  
de Jules Verne  
— gloire littéraire  
et succès publics —

日本ジュール・ヴェルヌ研究会主催、慶應義塾大学教養研究センター後援  
**ジュール・ヴェルヌ再発見 — 作家と大衆作家**

2017/10/22 (sun)  
10:00 → 17:30  
慶應義塾大学日吉キャンパス  
来往舎シンポジウムスペース

SF文学の祖、冒険傑作の小説作家として知られる  
ジュール・ヴェルヌですが、  
今日、その新しい評価にさらされたい  
ヴェルヌの関心が驚かれています。  
ヴェルヌ研究の第一人者ヴォルカー・デーハス氏を招き、  
現代史の専門家とともにヴェルヌの  
大衆文化を語ります。  
また、21世紀にヴェルヌを再発見ことの意義を考えます。

【講演者】  
1969年、ソ連大連(現遼寧)生まれ、ソ連出身の作家。  
1984年、東京大学(現慶応義塾大学)で博士号取得。  
1987年、東京大学(現慶応義塾大学)で助教授、後学芸員。  
1990年、フランス・ヴェルヌ研究会創設。  
ジュール・ヴェルヌ国際賞授賞式。  
1998年、フランス・ヴェルヌ研究会創設(現研究会)の代表理事。  
2005年、フランス・ヴェルヌ研究会創設(現研究会)の代表理事。  
2010年、東京大学(現慶応義塾大学)で教授。  
2015年、東京大学(現慶応義塾大学)で教授。  
2016年、東京大学(現慶応義塾大学)で教授。

【講演者】  
1970年、立命館大学(現立命館大学)で教授。  
1984年、東京大学(現慶応義塾大学)で教授。  
1987年、東京大学(現慶応義塾大学)で教授。  
1990年、東京大学(現慶応義塾大学)で教授。  
1993年、東京大学(現慶応義塾大学)で教授。  
1996年、東京大学(現慶応義塾大学)で教授。  
1999年、東京大学(現慶応義塾大学)で教授。  
2002年、東京大学(現慶応義塾大学)で教授。  
2005年、東京大学(現慶応義塾大学)で教授。  
2008年、東京大学(現慶応義塾大学)で教授。  
2011年、東京大学(現慶応義塾大学)で教授。  
2014年、東京大学(現慶応義塾大学)で教授。  
2017年、東京大学(現慶応義塾大学)で教授。



『VOYAGES EXTRAORDINAIRES  
DE JULES VERNE  
5 SEMAINES  
D'UN  
BALLON  
VENTRIER  
A L'ASSAULT  
DU  
CENTRE  
DE LA TERRE  
— LAOÛDÉS, CORBUS, ARGONAUTES —』

  
Jules Verne

  
Volker Dehs



## 研究交流 研究の現場から

教員が自身の研究内容を自由に語る企画で、軽食を交えての議論も活発に行われる。

2017年度も例年通りに春学期に1回、秋学期に2回開催された。本年度からは質疑応答の時間を確保するため、毎回一人の発表となった。

### ■第1回 2017年6月14日 (通算第19回)

講師：呉茂松 (経済学部)

「権利と権力のあいだ—現代中国の維権運動から考える—」

呉先生は、中国の改革開放政策によって人々の間に目覚めた権利意識について発表された。権利擁護を意味する「維権」の運動が市民に広がり、新しい制度の構築が求められるようになる。国家側はこれに一定の理解は示すものの、活動家の拘束など直接的な弾圧の動きも見せている。こうした権力と権利の間の緊張関係は、今後どういう展開を見せるか予断を許さない。質疑応答では、中国知識人層の現状についての活発な論議が行われた。

### ■第2回 2017年11月8日 (通算第20回)

講師：井口篤 (文学部)

「中世イングランド宗教文学の世界」

井口先生は、中世イングランドの宗教的な文学作品に着目して発表された。14、15世紀には、チョーサー、マロリーといった大家の他にも、ラテン語文化を模範とした優れた作品が生み出されていた。ラテン語宗教文学から正統的に英訳されたものもあれば、独創性が過ぎて教会から異端視されたものまで、多様な英語の文学が出現していたのである。中世文学の研究はともすれば英語史的な観点に偏ることが多いが、そうした言語学的関心に留まるのではなく、文学としての価値を見出そうという強い主張が打ち出された。

### ■第3回 2017年12月20日 (通算第21回)


講師：西尾宇広 (商学部)

「〈群衆〉の文法—19世紀前半のドイツ文学を中心に—」

西尾先生は、ドイツ文学における「群衆」の描

かれ方について、クライストを中心に置きながら論じられた。前半ではクライスト文学中の群衆についての解釈の変転を追いながら、研究者の読みがそれぞれの時代状況によって色づけられていることが示された。後半では群衆の描き方について、クライストの他にゲーテやホフマンの例を出して比較し、クライストには群衆の内部を描く独特の手法があることが、ハンドアウトによる事例の提示を伴って跡付けられた。

(高橋宣也)




**研究の現場から**  
サロン日吉 円卓の会へ  
ご招待!

「研究の現場から」は研究者交流サロンとして、教員の研究分野を紹介し、和やかな雰囲気でお話する企画です。  
軽食をとりながら、学部や分野を越えて交流を深めていただけます。

第十九期 6月14日(水)18:15～ 来往舎1階101

**呉茂松**(経済学部 専任講師)  
「権利と権力のあいだ:現代中国の維権運動から考える」

日吉キャンパスでは、大勢の教員が様々な領域で研究教育に取り組んでいます。お互いの研究を知り、情報を交換し合うことで、さらに素敵なアイデアが生まれることもあります。何より、まず知り合いになることが、より豊かな研究教育への第一歩だと教養研究センターは考えます。ぜひお気軽にお立ち寄り下さい!



主催:教養研究センター toaiwase-lib@adst.keio.ac.jp



## 研究交流 読書会推進企画 「晴読雨読」

ブルーノ・ラトゥール『科学論の实在—パンドラの希望』読書会を終えて

「晴読雨読」の新たな読書会として、ブルーノ・ラトゥール『科学論の实在—パンドラの希望』を読む企画が2017年4月からスタートした。フランスの哲学者ラトゥールは科学を人類学的手法で分析し、科学に関する独自の哲学を展開している。科学哲学の領域にとどまらず、文化人類学などでも近年注目を浴びている研究者である。しかし、まだ学部学生には馴染みが薄く、はたしてどこまで学生が集まるかと不安があったが、幸いにも多いときで学生が8人も参加してくれた。塾外からは「カドベヤ」のメンバーが2人加わり、議論の活性化に貢献してくれた。

読書会実施日は2017年4月26日、5月31日、6月21日、8月2日、10月11日、11月1日、12月13日、2018年1月17日、3月30日の計9回実施した。参加者は10～16人だった。

同書は、科学者の現場を描写する民族誌的記述や独特な具体例、そして個性的な図とともに、科学のとらえ方を根本から問い直しており、新しい視野を拓いてくれるきわめて刺激的な論考だった。ラトゥールの翻訳も手がけている理工学部の荒金直人先生が毎回丁寧なレジュメを用意し、わかりやすく解説してくださったのはありがたかった。おかげで読書会では活発な議論が可能となった。

特に意図したわけではないが、今回読書会でとりあげた本は「理系」と「文系」を横断する内容だった。結果として、さまざまな研究者が混在する日吉キャンパスにふさわしい書籍の選択だったと思う。惜しむらくは「理系」研究者が一人しか参加していなかったことだ。しかし、今後、理／文の区分を超えた知的交流の機会が日吉キャンパスで盛んとなることを大いに期待したい。

(工藤多香子)



教養研究センター読書会推進企画  
晴読雨読

ブルーノ・ラトゥール  
『科学論の实在—パンドラの希望』を読む  
第一回スタート!!

ラトゥール(1947年-)は、科学の人類学的研究を出発点に、射程の広い独自の思想を深めているフランスの哲学者です。  
『科学論の实在』は彼の中期までの研究の集大成です。これを読めばラトゥール哲学の本質にさまざまな角度から接近できます。  
ラトゥールの翻訳も手掛けている理工学部の荒金直人先生が案内人となってくれます。教職員・学生どなたでも自由に参加できます。  
哲学、科学論、人類学に興味のある方はぜひ!!

《課題図書》  
ブルーノ・ラトゥール『科学論の实在—パンドラの希望』  
産業図書、2007年 (初回は第一章を読みます)  
(課題図書の入手が困難な場合はお問い合わせください)

2017年4月26日(水)18:30～  
日吉キャンパス 来往舎2階中会議室  
お問い合わせ:工藤多香子(経済学部)takahakudo@25.keio.jp  
後援:教養研究センター



## 田辺元『懺悔道としての哲学』読書会

田辺元の『懺悔道としての哲学』（1945年）は、近代日本における哲学書・思想書として極めて重い地位を占める一冊である。田辺は先達の西田幾多郎の哲学の静態性・瞑想性・神秘性を批判し、その難点のよってきたるところを「西田哲学」の「場所的性格」に求めたと思われる。つまり、瞬間の中に永遠があり、瞬間という時間は永遠の時間を内包した点として空間的に切り出せる、時間を止まったものとしてつかまえられるのが、田辺の考える「西田哲学」であって、田辺はそれに対して「止まらない哲学」「動き続ける哲学」を考え、そういう「田辺哲学」によって不断の現実を常に能動的に捕えつづけ、止まって遅れて受動化する事の決してない「強い理性的主体を定立する哲学」が可能になると想定した。時計の歯車のような時を決して止めて考えられないようにする仕掛けとして田辺が重んじたのが「絶対媒介」であろう。

しかし、戦争という不断の現実の「理性化」に「田辺哲学」は失敗したと、自ら観念せざるを得なくなり、「絶対媒介」による「止まらない思想」という構想は活かしながら、理性的主体が定立されず悶えと苦しみの中でうごめき続ける「弱い理性願望的主体を定立し続けようとする哲学」としての「懺悔道哲学」に戦争末期から転換し、「敗戦国ならではの負のベクトルへの先進性」を自覚しつつ「理性の死の時代のための新たな哲学」の先駆けとなろうとしたのが、本書の内容ということになる。

そこに援用されるのは、浄土教思想や親鸞やキルケゴールやニーチェやシェリングやハイデッガーである。日本近代史と仏教思想史と西洋思想史を等しく視野に収めないと読み切れない著作であり、教養研究センターの読書会に相応しい書物と考え、案内役の片山杜秀が毎回解説を担当して、平均各回1章ずつを基本に、10月18日、11月29日、12月27日、1月24日、3月28日の5回、すべて夜に開催した。毎回2時間から2時間半程度であった。参加者は決して多くはないが、教職員と学生と外部参加者の親睦の場としても機能した。本年度は序文から第5章までを読み、残る部分は次年度に繰り越している。

(片山杜秀)

教養研究センター主催読書会

晴読雨読

教養研究センター主催の読書会を開催します。教職員、学生どなたでも参加できる読書会です。事前予約は不要です。どうぞお気軽にお集まり下さい。

第一弾

田辺 元

『懺悔道としての哲学』を読む

近代日本の哲学者、田辺元の主著『懺悔道としての哲学』をゼミナール形式で読み進めます。

「できると思っていましたが、できませんでした、すみません」というのが、簡単に言うと、田辺元の『懺悔の哲学』でしょう。太平洋戦争末期に生まれました。現代の世界と日本を考えるためにもヒントになる思想です。

片山杜秀君（法学部）と一緒にゆつくり読んでみましょう。

日時：2017年10月18日（水）18：30～

場所：日吉キャンパス 来往會2階大会議室

課題図書：田辺元『懺悔道としての哲学』（岩波文庫、2010年）

※今回は「序」から読みます。

お問合せ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp





## II 教育開発関連プロジェクト

### 1 設置科目

#### 1-1 アカデミック・スキルズ

前年度と同じく、日本語3クラス（水木金の第5時限）、英語1クラス（月曜第2時限）の計4クラスを開講した。担当教員は、日本語水曜クラスが片山杜秀（法、採点責任者）、川添美央子（商）、中川真知子（経）、福田桃子（経）、木曜クラスが川村文重（商）小林拓也（理、採点責任者）、酒井規史（商）、金曜クラスが西尾宇広（商）、原大地（商、採点責任者）、御園敬介（商）、英語クラスが井口篤（文、採点責任者）、コミサロフ、アダム（文）、横川真理子（教養研究センター非常勤講師）。

授業内容は例年の原則通りで、春学期に4000字、秋学期に8000字の論文作成を課し（英語は日本語相当の語数の論文）、秋学期にはさらに論文内容のプレゼンテーションを行うというものである。具体的な進行については担当教員に委ねており、統一的に細目を定めたシラバスはない。たとえば水曜クラスの場合だと、春学期には履修者を5グループに分けて、グループによる合同論文を各人1章4000字ずつ執筆させ、秋学期には各人が自由テーマで8000字の論文を執筆するというものであった。履修者数は、「履修申込者・履修許可者・春学期履修者・秋学期履修者・最終論文提出者」の順に記録すると、日本語水曜クラスが「36.24.23.18.16」、木曜クラスが「14.14.11.4.3」、金曜クラスが「39.24.22.16.15」、英語クラスが「16.15.12.7.4」。クラスによっては履修者が少なめといわざるを得ず、今後の大きな課題である。

年度末には、やはり例年通り、論文とプレゼンテーションのコンペティションが行われた。論文コンペティションは4クラス各2本ずつの計8本が参加し、4クラスからひとりずつの教員が審査員となって、金賞1、銀賞1、審査委員特別奨励賞1が選出された。プレゼンテーション・コンペティションも4クラス各2人ずつの計8人が参加し、来場者の無記名投票によって、金賞1、銀賞1、銅賞1が選出された。うち、プレゼンテーション・コンペティションの銅賞受賞者が英語クラス履修者で、他の入賞者はすべて日本語クラス履修者であった。（片山杜秀）

●2017年度極東証券寄附講座●

# アカデミック・スキルズ Academic Skills プレゼンテーション Presentation コンペティション Competition

学生が一年間培ってきた  
「知の探求力」を  
遺憾なく発揮します



2/7 (水) 14:00 ~ 18:00  
日吉キャンパス来往舎 1F シンポジウムスペース  
発表者：2017年度「アカデミック・スキルズ」クラスⅡ代表者  
主催：慶應義塾大学教養研究センター



## II 教育開発関連プロジェクト

### 1 設置科目

### 1-2 生命の教養学

#### —「教養」への「感染」

2017年度の生命の教養学は「感染」をテーマとしてオムニバス講義形式で展開した。講師のお名前と講義題目は以下である（敬称略）：小野裕剛（法学部准教授）「感染してくる“奴ら”の生物学的正体と生体防御の基礎」、山下一夫（理工学部准教授）「表象としての「感染」：ゾンビからキョンシーへ」、稲葉寿（東京大学大学院数理科学研究科教授）「人口と感染症の数理」、鎌倉光宏（看護医療学部教授）「感染症と医学：社会の対応の歴史」、岩田敏（医学部特任教授）「感染症と予防接種：ワクチンで変わる、感染症とのたたかい」、井上周平（立教大学文学部兼任講師）「近世ヨーロッパのペスト流行」、中尾央（山口大学国際総合科学部助教）「文化はどのように感染するか」、石塚久郎（専修大学文学部教授）「うつるんです：感染と文学」、中谷比呂樹（本学グローバルリサーチインスティテュート特任教授）「地球規模課題としての生命を考える：新たな挑戦と機会に満ちた新分野」、寺田真敏（株式会社日立製作所横浜研究所）「コンピューターウイルスへの感染」、鈴木晃仁（経済学部教授）「無症候性キャリア（健康保菌者）と近現代社会の歴史」。以上の講義は1)生物学的・医学的・数学的なアプローチによる病原菌の感染、2)歴史的アプローチによる過去の人間と感染の関わり、3)感染という角度から捉える文化・表象というまとまりに分けられる。

過去最多の100名以上の受講生を得たが、その半数は本年度から本授業が理工学部の卒業単位の一部と認められたことで増えた同学部生の受講生だった。学部を問わず受講生の質問は、しばしば講師を驚かせる程高い質だった。本年も講義と関連する書籍等を探して読み期末試験のなかで正しく引用あるいは参照することを課した。そのため日吉メディアセンターのご協力で「情報リテラシーセミナー」を授業前の昼休みに一度開催した。総じて知的な「ウイルス」の「感染」に成功したと報告できる。

（赤江雄一）



稲葉寿氏



鎌倉光宏氏



山下一夫氏

## 1 設置科目

## 1-3 身体知

## —創造的コミュニケーションと言語力—

今年の夏期集中の身体知では、「現実と非現実」をテーマとして、朗読・身体表現・他者から聞く・創作する、という過程を経て、最終日に創作したものを公開で発表する授業を展開した。切り口として取り上げた作品は藤枝静雄の「家族団欒」、そしてアメリカの若手作家、ジョー・ミノの“People Are Becoming Clouds(人は雲になる)”の2作である。まったく異なる作風の作品を使ったのは、世代の異なる学生たち(通信教育課程10名、通学課程7名)を一室に会した授業であったからであり、その意味で、この異世代交流は作品の解釈に大いに寄与した。

この授業ではタイトルどおり、身体を介したワークショップを多数取り入れることで、文字化された作品の世界を、身体を通して読み解くことに重点を置いているが、本年度は雨続きの6日間となり、戸外でのワークショップが十分にできなかった。しかしその分、作品を読み込み、他者の朗読を聞き、新たな解釈を導き出す時間をたっぷりと取ることができた。世代を超えて集まる一人ひとりが、他者の声から導き出される新たな解釈を披露しあうことで、異なる作品世界が導き出されていくと同時に、作品を通じての他者理解も行うことができたという実感がある。

扱った二作品の前者、「家族団欒」はまさに異なる世代の家族が、死者として再会するという短編であり、夢のような世界の中にも静謐とした情感が満ち溢れる掌編である。一方ジョー・ミノの短編は、「人が雲になる」という突然の非現実的な出来事に、当事者たちが現実的に向き合おうとする悲喜劇的な物語である。双方の作品とも、非現実的な設定に、読者たちを引き込んでいく。今回はそのような文体やレトリックを解釈し、朗読に生かしていくことから授業を開始した。

そしてペアになってブラインド・ウォークを行う、グループで大きな絵を描く、などのいくつかの身体表現ワークショップを織り込むことで、アカデミック・コミュニティの構築も行っていった。

その後、他者の物語を聴くこと、書くことから作品を作り上げていくという過程に移っていった。ここでは、特に他者が書いた自分についての小さな物語(日常のことで良いし、もっと長いスパンで自己を眺めたものでも良い)を朗読することが、貴重な時間を提供した。書き手の名前を伏せた物語を並べ、参加者全体が歩きながらそれらを読んだ上で、自分の朗読したい作品を選ぶ。そしてそれを朗読したあとで、作者に立ち上

がってもらおうというものである。朗読のあとで作者が書いたときの思いや背景を公表し、朗読者は、この作品を選んだ理由と朗読したときの感想を述べた。他者の声を通すことでまったく新しい自分の姿が見えてきた、と述べる作者たちが大勢いたし、朗読者たちは作者の新しい一面の発見にうれしい驚きを覚えた。

このような過程を経て、創作と最終日の発表会へと移っていった。発表会では、個人の創作と朗読のみならず、世代を超えたグループによる創作発表で大いに盛り上がった。朗読では、授業で取り扱った作品ではなく、自分が読みたい作品を持ってきて朗読した参加者や、ワークショップの中で書いた、自らの作品や他者の作品を読んだ参加者もいた。グループの発表会では、踊りあり、歌あり、演劇あり、コントありで、また異なる身体表現を全参加者が披露し、楽しんだ。

この授業のもう一つの特徴は、今までこの授業を履修した学生たちが遊びに来てくれることであろう。特に通信教育課程生にとっては、授業期間は夏期スクーリングの第二期目にあたり、発表会のみならず、出席できるときに積極的に聴講に来てくれる。今年の授業でも過去数年間の学生たちが発表会や授業を訪れ、中には飛び入りで朗読会やグループ発表会に登場してくれた元履修者もいた。発表会ではそれぞれの発表に対して、参加者のみならず観客も積極的な質疑応答や感想の交換を行った。また、発表会の後は、簡単な懇親会を行い、参加者と観客ともども授業の振り返りを行った。元履修者たちにとっては、以前のクラスの振り返りの回ともなり、身体を通じた学びのその後の効用も披露された。

このような体験は、普段キャンパスで同世代の仲間たちとのみ時間を過ごす通学生にとって、貴重な体験であるのみならず、通信生にとっても大切な時間であった。最後の振り返りで、40代の通信教育課程の参加者は、以下のような意見を述べてくれた。「この6日間こそが非現実そのものでした。現実に戻るのが寂しいですが、この非現実には忘れられないものとなるでしょう。」

授業のあとで、振り返りのレポートを提出してもらったが、授業評価は大変高かった。特に評価されたのは、文字化された作品の解釈の広がり、異世代交流の効用である。しかしながら、これから取り組むべき課題も提示された。6日間という短い期間をどのように効果的に使うのか。今後も「集中講義」のあり方を模索することで、「集中」的な学びのモデルを提示できることだろう。(横山千晶)



## II 教育開発関連プロジェクト

### 1 設置科目

#### 1-4 身体知・音楽

株式会社龍角散および極東証券株式会社の助成により、寄附講座「身体知・音楽Ⅰ～Ⅳ」を設置し、実施した。本講座は、大学教養教育における音楽教育の可能性を広げ、ひとつのモデルをうち立てる事業として実施した。音楽文化と歴史の追体験し、音楽家を育てるのではなく未来の良き音楽の担い手（とりわけ良き聴き手としての）を育てる目的で、慶應義塾大学の正規授業として設置されている。そのなかで、専門的な訓練を重ね、高いレベルの技術習得を目指してきた。

身体知・音楽Ⅰ、Ⅱは、それぞれ声楽クラスと器楽クラスの2クラス、身体知・音楽Ⅲ、Ⅳはアドヴァンスドクラスとして声楽クラスの1クラスを開設した。声楽クラスの参加者はⅠ～Ⅳを併せて26名、器楽クラスの参加者は28名であった。

本講座関連の成果発表として、7月と1月に器楽クラスの発表会をそれぞれ1回ずつ、2月には声楽クラスの発表会として、ヘンデルの《メサイア》全曲演奏会、合計3回の演奏会を実施した。器楽クラスの発表会には、横浜市との協力も得てクラシック・ヨコハマの関連コンサートとして実施され、声楽クラスの発表会には在京若手を中心とする古楽のエキスパートの特別オーケストラと共演した。

昨年度で住友生命保険相互会社による5年間の助成が終了したため、今年度は極東証券寄附講座としてⅠ、Ⅱの講座が開設された。Ⅲ、Ⅳの講座は声楽の身体的訓練を強化するために、株式会社龍角散の支援を得て昨年度より設置されたものであるが、2年目ということもあり、技術が次第に蓄積されかなりのレベルの高い演奏が次第にできるようになっている。

本授業は、演奏技術の向上だけでなく、学生の言語力、コミュニケーション能力、歴史・社会・文化の理解・洞察力の向上と、社会・地域貢献も兼ねて行われているが、そのモデルとなるかたちが、これまでの知見とノウハウの蓄積によって形成されていると思う。

本事業は、振り返りのために学生アンケートおよび、演奏会来場者アンケートをおこなっている。学生アンケート回答率50%のうち、この事業に満足しているという回答が100%、同種のプロジェクトにまた参加したいとの回答が97%と非常に高い満足度を誇る授業が展開できた。演奏会来場者数も毎回194～409名となっており、地域文化貢献の一助となっている。（佐藤 望）

極東証券寄附講座事業 / クラシック・ヨコハマ2017大学連携コンサート

**慶應義塾大学  
コレギウム・ムジクム  
古楽アカデミー・オーケストラ  
演奏会** 管弦楽組曲様々

慶應義塾大学コレギウム・ムジクム古楽アカデミー (C941)楽器使用  
指揮・チェンバロ・全体指導：石井 明

2018年1月13日(土) 14時開演 (13時30分開場)  
入場料 学生優待あり

藤原洋記念ホール  
(慶應義塾大学日吉キャンパス協生館内)  
アドレス：東急東横線・日吉駅西口・横浜市青葉区藤原洋記念ホール 日吉駅西口1分

【主催】慶應義塾大学芸術研究センター、クラシック・ヨコハマ推進委員会、慶應義塾大学日吉キャンパス  
【問い合わせ】慶應義塾大学芸術研究センター 045-556-1339 <http://musicology.kyushu.ac.jp>

龍角散寄附講座 極東証券寄附講座

**G. J. Händel** ヘンデル  
**MESSIAH** メサイア

出演：隠岐 彩夏 (ソプラノ) 上杉 清仁 (カウンターテナー)  
山口 昌範 (テノール) 中川郁太郎 (バス)  
原田 高 (コンサートマスター) 山本 徹 (チェロ)  
根本 卓也 (オルガン) 山本 龍子 (チェンバロ)  
慶應義塾大学コレギウム・ムジクム・アカデミー音楽アンサンブル  
慶應《メサイア》プロジェクトを支える若きエキスパートによる特別オーケストラ  
指揮：佐藤 望

2018年2月6日(火) 18時30分開演 (17時30分開場)  
プレイトーク17時45分 第2部開始予定19時15分  
藤原洋記念ホール (慶應義塾大学日吉キャンパス協生館内)  
アドレス：東急東横線・東横線・横浜青葉区藤原洋記念ホール 日吉駅西口1分  
入場料2,000円(全自由席) ※未就学児入場不可  
発行販売：10月1日より慶應義塾大学芸術研究センター/Arsound.com/Shop/

一般販売：10月30日よりクラシック・ヨコハマ【5画】でプレイバックショップ内マルチコピー機 【Web】<http://Ticket.jp>、eチケットショップ(ekushu.jp)、  
慶應義塾大学日吉キャンパス 045-556-8460、慶應義塾大学日吉キャンパス研究部045-566-1339

【主催】慶應義塾大学芸術研究センター、慶應義塾大学日吉キャンパス  
【問い合わせ】慶應義塾大学日吉キャンパス研究センター 045-556-1339 <http://musicology.kyushu.ac.jp>

## II 教育開発関連プロジェクト

### 1 設置科目

#### 1-5 身体知・映像

2017年の身体知・映像クラスは、とてもエキサイティングなクラスだったが、2名のドロップアウトを出し、有機的なチームワークにかかる例年になく波乱万丈のクラスだった。

春学期は3つのグループに分かれて、三者関係をベースにした10分前後のオリジナル映画を作った。毎年、春学期の段階では、映像の質よりもストーリーの質を優先させるようにしている。そして映像制作のグループワークのなかで自分の声を出していくことに慣れていくのが目標なのだが、これがなかなか難しいようだった。

秋学期は春学期の学習を踏み台として本格的な短編映画の制作に向かっていく。2017年度は2つのグループに分かれて、川上弘美の短編集『なめらかで熱くて甘苦しくて』のなかから「テラ」と「アクア」を選び、それらを自由に翻案し、独自の映画作品へと作り変えていった。映像作家の山田健人氏、映画作家の諏訪敦彦氏を講師として招聘し、映画とは何か、映像制作のいろはについて講義していただいた。

こうして完成したのが、「テラ」と「アクア」という二つの短編映画だ。前者は、大学生二人が納骨のためにはるか遠くまで列車の旅に出かけるという一見単純なストーリーなのだが、生と死の境界線が次第に不明瞭になっていく絶妙なドラマをみごとに映像作品としてまとめている。後者は、父親の死を静かに受け入れる娘の物語だ。若い女性たちを襲いかかる理不尽な暴力を親密に描き出した映像作品だ。みずみずしい感性で描き出された作品に心から感動した。

この二つの学生作品は、アカデミック・スキルズ・プレゼンテーション・コンペティションにて初上映した後、2018年4月6日に日吉キャンパス来往舎のシンポジウム・スペースにて、一般公開した。二つの映画の上映後二人の監督のトークが行われた。質疑応答の時間にはたくさんの質問がフロアから投げかけられ、一年の締めくくりとなる充実したイベントとなった。さまざまな葛藤があったが、こうして最後に素晴らしい作品が作れたことで、参加者たちの大いなる成長を感じた。

(佐藤元状)





## 2 情報の教養学

「情報の教養学」は、近年の高度情報化社会の急速な発展における最新的话题を提供することを目的とした講演シリーズである。

2017年度では、「情報の光と影」をテーマに6回の講演を開催した。情報の利用による様々なメリットと共に、気を付けなければいけない問題について、様々な分野の一流の講師に講演をいただいた。

春学期では、まず、松岡正人氏（(株)カスペルスキー）が、「増え続けるサイバー犯罪、サイバー攻撃からどのように身を守るか」という題目でサイバー犯罪・サイバー攻撃を解説した。メールやWWWを通した犯罪はもちろんのこと、最近話題となったランサムウェア、家電のハイジャックなど、多数の事例をとりあげた。各自が被害にあわないために最低限できることを5つあげて、講演を結んだ。次に、福井健策氏（弁護士）が、「著作権の必須知識を今日90分で身につける！」という著作権の入門を実施した。法的に問題がなくても、SNS上では「黒」と断言され、炎上するといった新たな問題についても言及した。春学期の最後に、手塚悟氏（政策・メディア研究科）が、「個人情報の漏洩とその対策」という題目で個人情報の解説をした。情報漏洩にかかわる詐欺、個人情報保護法、ビッグデータなどをとりあげた。特に、改正個人情報保護法が施行された直後の講演であったため、非常に注目すべき内容であった。

秋学期では、まず、佐々木涉氏（クリプトン・フューチャー・メディア（株））が、「初音ミクの影響力：バーチャルとリアル、ユーザーとファン達との10年、その先へ」という題目で、ご自身がその開発の中心となった初音ミクについて講演した。バーチャル技術を扱った初音ミクの生い立ちから今までの多大な影響と共に、今後の展望について紹介した。次に、加藤真平氏（東京大学）は、「完全自動運転～コンピュータはヒトを超えるか」という題目で車の完全自動運転について解説した。技術面だけではなく、自動運転が浸透するための技術以外のハードルについても述べた。最後に、杉本麻樹氏（理工学部）は、「超スマート社会における身体情報学——視線や表情の理解と共有を目指して」という題目でバーチャル技術について述べた。特に、視線や表情などをいかにコンピュータで計測・分析・利用するかについて、応用例を交えながら解説した。

一部の講演はYouTube上で公開されており、情

報の教養学のホームページ（<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp/>）から視聴できる。（高田真吾）

2017年度情報の教養学第1回講演会  
慶應義塾大学教養研究センター主催

# 増え続けるサイバー犯罪 サイバー攻撃から どのように身を守るか?!

ネットワークの中、サイバーの世界には国境がありません。また、技術革新によって言葉や文化の壁さえも乗り越えつつあります。サイバー犯罪と実世界は密接につながり、IoTという新しいインフラにより、より脅威が拡大し、身近なものになっています。本セッションでは最近のサイバー犯罪・サイバー攻撃の傾向を分析解説するとともに、いまや関わらずに済むことのないこの世界の脅威からいかに身を守るかについて述べます。

## 4月19日(水) 16:30~18:00

講師：松岡正人  
日本ネットワークセキュリティ協会  
IoT Security WGリーダー

会場：日吉キャンパス 来往舎1F  
シンポジウムスペース

対象：塾生・教職員（無料予約不要）  
問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

知らなかったではすまされない  
忍び寄るネット  
犯罪の恐怖!

松岡正人  
30年以上にわたるプログラマー、システムエンジニア、マーケティング、テクニカルサポートなど幅広い経験。幅広い分野のネットワークエンジニアとしての立ち上げ経験も有し、ソフトウェア開発に関する記事や書籍の執筆など、学術界と実務界との両方を歩む。業界への理解を深めるとともに、自身の育成に貢献。現在は、IoT、産業インフラのサイバーセキュリティの存在意義の重要性の理解や標準化活動などを行っている。

日本ネットワークセキュリティ協会 IoT Security WGリーダー  
ソフトウェアシステムインテグレーション事業部 兼 兼務部長、IoT Security WG  
COMMITTEE 兼 兼務部長、IoT Security WG 研究部 兼 兼務部長、IoT Security WG  
Marketing Chair for Japan、国立高専機構 東京工業高専 非常勤講師（情報工学）

@KeioLearning  
<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp>

2017年度情報の教養学第2回講演会  
慶應義塾大学教養研究センター主催

# アソウの 著作権の必須知識を今日 90分で身につける!

## 5月17日 18:15~19:45(水)

講師：福井健策  
弁護士（日本・ニューヨーク州）  
日本大学芸術学部・神戸大学大学院客員教授  
大学院客員教授

会場：日吉キャンパス 来往舎1F  
シンポジウムスペース

対象：塾生・教職員（無料予約不要）  
問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

SNS、レポート、各種サークル活動—全ての人が情報発信する時代を迎えて、著作権は万人にとって必須の「基本教養」になりました。危険な落とし穴や炎上を避けつつ、不必要に萎縮せず情報を使いこなすため、基礎から「使える著作権」を学びます。

「基本教養」になりました。危険な落とし穴や炎上を避けつつ、不必要に萎縮せず情報を使いこなすため、基礎から「使える著作権」を学びます。

参考図書：福井健策「初音ミク入門」(5つ星アプリ—新書)

@KeioLearning  
<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp>

2017年度情報の教養学第3回講演会  
慶應義塾大学教養研究センター主催

# 個人情報情報の漏洩とその対策

インターネットで買い物などをすると、何気なく自分の情報を登録して、会員になることが多々あると思います。

この会員情報などが、自分の同意した目的と異なる使われ方をしたり、または漏洩されたりすることが増えています。

本セッションでは、個人情報保護に関して制度面、運用面、技術面での動向について、わかりやすく説明したいと思います。

**6月28日**  
18:15~19:45 (水)

講師：手塚 悟  
慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科  
特任教授 博士(工学)  
場所：日吉キャンパス 第4校舎  
独立館D202  
対象：塾生・教職員 (無料 予約不要)  
問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

あなたの情報  
ネラワレテマス。

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授  
博士(工学)。1984年慶應義塾大学工学部数理工学科  
卒業。同校日立製作所システム開発研究所を経て、200  
9年東京工科大学コンピュータサイエンス学部教授。  
2014年より現職。現在、個人情報保護委員会委員、  
総務省情報・イノベーション政策推進インフラ  
等におけるサイバーセキュリティの推進担当サブ  
ロウディディレクター、サイバーセキュリティ戦略  
本部サイバーセキュリティ専門委員会委員など。



@KeioLearning  
http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp

2017年度情報の教養学第4回講演会  
慶應義塾大学教養研究センター主催

**10月25日**  
18:10~19:40 (水)

講師：佐々木 渉

クリプトン・フューチャー・メディア株式会社・音声データセンター  
初音ミク・音声合成ソフト・開発プロデューサー

場所：日吉キャンパス 第4校舎B棟2階 J21番教室

対象：塾生・教職員 (無料 予約不要)

問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

# 初音ミクの影響力

バーチャルとリアル ユーザーとファンとの10年、その先へ

2007年、2chや動画投稿サイトを中心に集まった  
ユーザーやファンベースに熱い支持を得て、様々  
なムーブメントとリアル展開に派生していった初音ミク  
。その活動の推移や広がりをご紹介します。また、  
バーチャルキャラクターならではのテクノロジーとの  
繋がり、彼女の個性である「歌声」についての今後の  
展望をお話させていただきます。

佐々木 渉

「初音ミク」/ 歌声合  
成関連プロジェクト・チーフプロデューサー。  
1979年、札幌市生まれ。2005年、ク  
リプトン・フューチャー・メディアに入社  
し、07年、歌声合成ソフトウェア「初音ミ  
ク」の企画・開発を担当し大ヒット。その  
後、同社のVOCALOID製品や関連企業のプ  
ロデュース・ディレクションを手掛ける。  
他、新たな歌声テクノロジーを研究するOn  
gaACCELプロジェクトへの参加や、Apex  
TwinやArca、Squarepusherなど電子音楽  
のライナーノーツを手掛ける。



http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp @KeioLearning

© Crypton Future Media, INC. www.piapro.net

2017年度情報の教養学第5回講演会  
慶應義塾大学教養研究センター主催

# 完全自動運転 コンピュータはヒトを超えるか

**11月15日**  
18:15~19:45 (水)

講師：加藤 真平  
東京大学大学院情報理工学系研究科准教授  
場所：日吉キャンパス 兼往会1F  
シンポジウムスペース  
対象：塾生・教職員 (無料 予約不要)  
問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

人間の操作を一切必要としない完全自動  
運転システムの実用化は、規定路線であ  
る。特に市街地での完全自動運転の実現  
は大きな市場を切り開き、社会的価値も  
大きい。本講演では、市街地での完全自  
動運転用途に開発されたオープンソース  
ソフトウェア「Autoware」の最新動向を  
紹介し、今後の実用化に向けたベンチ  
ャービジネスについても語る。

加藤 真平

2008年慶應義塾大学大学院  
理工学系研究科後期博士課程  
修了(博士(工学))。2012  
年名古屋大学大学院情報科  
学研究科講師。2013年同研  
究科准教授。2016年東京大  
学大学院情報理工学系研究  
科准教授。現在、オペレー  
ティングシステム、並列分散シ  
ステム、自動運転システムの  
研究開発に従事。



http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp @KeioLearning

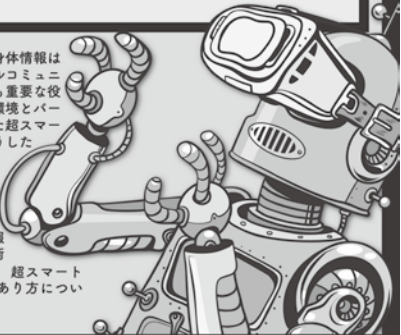
慶應義塾大学教養研究センター主催 2017年度情報の教養学第6回講演会

# 超スマート社会に おける身体情報学

視線や表情の理解と共有を目指して

視線や表情といった身体情報は  
実社会のノンバーバルコミュニ  
ケーションにおいても重要な役  
割を担っている。実環境とパー  
チャル環境が融合した超スマート  
社会においてはこうした  
身体情報をどのように  
活用していくことが  
できるだろうか。

本講演では、身体情報  
を計測・解析する技術  
の紹介を交えながら、超スマート  
社会における身体のあり方につ  
いて考えていきたい。



**12月6日 (水)**  
18:15~19:45

杉本 麻樹

慶應義塾大学理工学部情報工学科  
准教授。1978年生まれ。電気通  
信大学大学院電気通信学研究科博士  
後期課程機械制御工学専攻修了。  
博士(工学)。専門は、ヒューマン  
インタフェース、眼動き解析セン  
サやウェアラブルデバイスを活用  
した情報計測によって、実環境と  
バーチャル環境におけるシームレ  
スなインタラクションの実現を目  
指した研究を行っている。



http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp @KeioLearning



## 3 実験授業

## 3-1 庄内セミナー

第8回庄内セミナーは、8月29日から9月1日までの3泊4日、例年通り山形県鶴岡市の鶴岡タウンキャンパス（TTCK）を拠点にして開催された。2017年も総合的なテーマとして、「庄内に学ぶ〈生命〉—心と体と頭と—」を掲げ、これに基づいたさまざまなアクティビティを行った。

そもそも庄内セミナーは、出羽三山での修験に見られるように古代からの生命観が今でも息づいている一方、先端生命科学研究所といった最先端のバイオテクノロジーの研究拠点がある庄内地方で、生命とは何かということを変更してとい直すことが目的である。また同時にそうした古代の生命観を維持しつつも、最先端の生命観をも柔軟に受け入れる庄内の気質、庄内文化にも接し、共存と多様性をも考えるものである。

2017年度は学部生26名、大学院生1名の合計27名が参加した。初日の8月29日午後、TTCKに現地集合した参加者は、酒井忠久氏（致道博物館館長）から「庄内の歴史と文化」と題する庄内文化論をまず聴いた。次いで6班に分かれ、「生命」をキーワードにして、マインド・マップの作成をし、自分たちの死生観を視覚化した。その日の夜は、庄内文化に精通している東山昭子氏（鶴岡総合研究所顧問）による「庄内にまなぶ生と死」と題する講義があり、その後、東山氏と学生とのあいだで議論が交わされた。

2日目の8月30日は、まずかつて湯殿修験の拠点であった湯殿山注連寺で即身仏を拝観し、住職の佐藤弘明氏から法話と説明を受けた。次いで明治維新以降、旧庄内藩士が開墾し、養蚕を行ってきた松ヶ岡開墾場を見学した。松ヶ岡開墾場は現在、日本遺産に指定されている。知憩軒での地元食材を使った昼食の後で、TTCKに近い旧藩校の致道館を見学、「庄内論語」の素読体験を行った。その後慶應義塾大学先端生命科学研究所で、最先端のバイオテクノロジー研究の現場を見学した。夜は講師に岡浩太郎氏（理工学部教授）を迎え、「シュレーディンガーから73年後に再び問う『生命とは何か？』』という題目で最先端の科学に基づく生命観について講演をしてもらい、その後学生との活発な議論が行われた。

3日目の8月31日は、羽黒山にて修験体験を行った。羽黒山の隨身門近くにあるいでは文化記念館で、全員が白装束に着替え、立谷沢川の支流、玉川で滝行をし、羽黒山中を抖擻し、床固め、魂鎮め、南蛮

燻し、火渡りを行い、「擬死再生」の修法の一部を体験した。この日の夜は、昼間の修験体験を踏まえ、古代人の生命観がどのようなものかを大出が説明し、古代人の生命観についての議論を重ねた。2時間ほどの講義・議論の後で、羽黒山山頂の出羽三山神社でこの日の夜に行われる八朔祭の見学に出向いた。八朔祭は稲穂の順調な生育を祈願するものであり、秋の峯と呼ばれる修験に参加している修験者たちによって行われる一種の火祭りである。

最終日の9月1日は、初日に作成したマインド・マップを見直し、三日間の体験を通して自分たちの死生観がどのように変化したかを議論し、発表してもらった。その後、鶴岡市企画部政策企画課長の永壽祥司氏（塾員）も参加しての懇親会となった。

庄内セミナーは地元新聞にも取り上げられ、8月31日の「庄内日報」、9月1日の「山形新聞」「庄内日報」、9月2日の「山形日報」でセミナーの活動が報道された。

学生からの反応としては、「即身仏から最先端の科学までのスケジュールが濃密な4日間でした」（経済学部）など濃密な体験であったと感じたようである。一方、テーマやプログラムについては、「生命について、様々な角度から考えることができたのでよかったです」（理工学部）、「理系的視点と文系的視点の両方からプログラムが組まれていてよかった」（商学部）と生命を文系、理系から多角的に捉えることができたことがよかったようである。また「まさに結論が出ない議論とはこのことだと思いました」（理工学部）や「結論が出ない問題・テーマを考えたり、議論したりできたのがよかった」（理工学部）と答えの出ない、形而上的なものを議論できたことが学生には刺激的であったことが分かる。

なお、この庄内セミナーに関しては「2017年度第8回『庄内セミナー』報告書」に詳細がまとめられており、学生の「気づき」についても知ることができる。

（大出 敦）

慶應義塾大学教養研究センター主催

# 第8回 庄内セミナー

「庄内に学ぶく生命 (いのち) > 心と体と頭と <」

ミニ山伏体験・講義と対話・地元との交流を通して庄内地方の歴史・文化・自然を体感して「生命」をめぐる幅広い「学び」を体験します。

期間：8月29日(火)～9月1日(金) 3泊4日  
 場所：山形県鶴岡市(鶴岡タウンキャンパス他)  
 定員：30名 対象：慶應義塾大学学部生・大学院生・塾員  
 参加費用：無料 ※現地までの交通費は自己負担。現地集合・現地解散です。

★説明会開催★ ご興味のある方、ご参加下さい！  
**6月9日(金) 18:15～**  
 日吉キャンパス来住舎1階シンポジウムスペース  
 ★参加申込期間 6月9日(金)～7月14日(金)まで  
 ■詳細・申込  
<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/shonai/>

体験体験：明黒山にて  
 TTCX 先端生命科学研究所  
 鶴岡市街景  
 火渡り  
 滝打ち

お問合せ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

庄内セミナーポスター



滝打ち



山伏体験



マインドマップ作成



火渡り



関連図書展示



## 3 実験授業

## 3-2 過去から未来を紡ぐ「日吉学」

—キャンパスの古層を探求・体感した縄文編

未来先導基金の助成を得て、2017年度日吉学は2015年16年に引き続き、縄文をテーマとするプログラムの完成を目指した。2019年からの正規化にむけてより実践的な授業形態にすべく毎回出席できるモニター学生を募集し、高大連携プログラムのシミュレーションも兼ねて塾高生の参加を得ることができた。今回はあらかじめ「縄文時代から現代の我々が学ぶことはなにか」という課題を設定し、最終日のグループ発表に収斂できるように各回授業内容を調整することが主目的であった。自然・地理・地形・考古学の切り口から、4日間180分6回相当の実験授業を行った。

初回(2017年9月30日)は日吉学の趣旨について、不破(経済学部)から「身体知／アクティブ・ラーニングによる体験型学習を通して日吉という身近な場の古層への理解を深め、最終的にはグループによる論文執筆と発表を行うこと」を説明した。次に安藤広道先生(文学部)が「なぜ縄文を学ぶのか」との問いに始まり、日吉一帯の縄文遺跡の講義。縄文の1万年の間には気候変動や人口の増減、土器の造形に多様な変化がみられるにもかかわらず「縄文」と総称する可否、これまでの「常識」を見つめ直し考えようと学生の問題意識を喚起した。西別館への移動途中に日吉台地の地形と貝塚の位置を確認し、西別館では年代順に配置された縄文の遺物を手に、学生たちは次々に疑問を安藤先生に投げかけ、対話を繰り返す。軽やかで精緻な亀ヶ岡土器の芸術性の高さ、精巧な漁撈用鍬や装身具からは当時の食生活やものづくりへのこだわりを体感し、過去の遺物に直接触れることで縄文を理解する豊かな時間となった。

10月7日の地理編では、日吉周辺に晩期の貝塚がないのはなぜかという疑問から、太田弘先生(普通部)が開講し、「地形と環境の変遷」についての講義を藤森孝俊先生(普通部)が行った。学生たちは温暖化で海水面が上昇した場合の「海岸線」を地図に描く作業を通して、縄文の日吉に想像力を飛翔させる。海進時に蝮谷は水没し海深20～40メートルに達し、水温は亜熱帯でイルカや鯛、ヒラメが食卓に上がるとのこと。初回の考古学編で目にした漁撈用鍬の記憶が結びつく。さらに古生物地理が専門の芝原暁彦氏(地球科学可視化技術研究所)はスケールの大きな地球規模の講義で学生を啓発し、当時の気候変動と地形について活発な質疑が交わされた。

さらに3Dマッピングによって可視化された日吉の水脈と地形の変化に学生は魅了された。

10月14日の自然編では、福山欣司先生(経済学部)が前回までの知識をまとめ、日吉一帯の地形・地質と植生について講義しながら、縄文人はどのように食糧を確保したのかという問いへ接続。過去1万2千年の花粉分布図から環境変化を推察し、主要食である種実類スタジイをキャンパスで採集した。1人5分の制限時間内で採取し、縄文人の調理方法によって長沖暁子(経済学部)、持田浩治(経済学部)両先生の助けを得て調理・試食した。その後、縄文人の摂取カロリーを予想し、各グループの採取平均値とカロリー計算の上、1日1人が生きるための食糧確保に必要な労働時間を算出した。虫害や不作などのリスク要因も考え学生がはじき出した時間は37分から60分。縄文人は存外、食糧確保に時間を要しなかったのか、という疑問がわいたようだ。縄文人の食べ物を採取・再現することで、自然と繋がりを生活をする縄文人の生き方を体感し、縄文時代を総合的に考える場となった。最後のメは、大出敦先生(法学部)によるテーマの絞り方講義。熟練の妙技で、マインドマップによる発散と収斂の技法によって、講義、実験、討議を通して学んだ縄文を現代に収束させ、グループ発表のテーマを絞りこんだ。

11月3日午前は班ごとにプレゼンテーション準備とリハーサルを行い、安藤、阿久沢、太田、大出、福山、長沖、不破がその指導にあたった。午後はグループ発表、教員全員と参加者による合評会を行った。

グループ発表準備のために教員オフィスアワーとアカスキ修了生による「学習相談」で連携をとり、教養研究センターが培った教育の蓄積とノウハウをフルに活用するプログラムとなるよう組み立てた。TA学生によるグループ発表報告書は以下の通り：1班「縄文時代～環境変化による進歩～」2班「働き方改革 in 縄文」3班「縄文人の生活様式から学べること」事後アンケートによる学生の声：「縄文人は単純な人間とイメージしていたが、縄文土器に触れたり縄文人の労働時間を計算したりして、そのイメージがとても変わった」(高等学校1年)、「実際に見て、感じて考える、そして仲間と議論するという過程はとてもおもしろく、意義深かった」(薬学部1年)

(不破有理)



## 4 「学び場」プロジェクト

大学の図書館には、図書の検索等についての相談員だけでなく、図書館を利用して学習・調査・研究をしたい学生に具体的な学習の道筋を手引きする相談員が居てもよい。実際、その種の学習相談員は多くの大学の図書館に存在する。だが、そこで相談員を務めるのは、たいてい正規の職員や大学院生のアルバイトであろう。慶應義塾大学の日吉のメディアセンターでは、その点で、かなり独自の試みが行われ続けている。教養研究センターとメディアセンターの共同の事業として、教養研究センター設置授業のアカデミック・スキルズを履修済の学生が、そこで学んだ論文やレポートやプレゼンテーションの書き方・仕方を非履修者にも伝授すべく、メディアセンターで学習相談の役を務める。そこでの学習相談員は原則として学部生が想定されている。学部生を学習相談員として大学の図書館が雇用することは、日吉の試みが日本では先駆けであり、いまだに類例の極めて乏しい取り組みかとも思われる。とはいえ、学部生で必要な相談員の人数を賄いきるのは現実問題として難しいところもあり、また大学院生レベルの知識と経験も現場においては欠くべからざるものなので、院生と学部生のコンビネーションが大切なものとなる。2017年度の学習相談員は大学院後期博士課程4名（うち法学研究科2名、商学研究科1名、社会学研究科1名）、修士課程1名（法学研究科）、学部4年生3名（全員が法）、3年生5名（文1名、法2名、商2名）、2年生7名（経2名、法4名、商1名）、そして法務研究科1名（法科大学院）、以上計21名で構成された。院生にも学部生時代にアカデミック・スキルズを履修した者が含まれている。

2017年度の学習相談カウンター業務の実績は、相談件数にすると春学期が440件、秋学期が191件、通年で631件となる。2009年度から2015年度までの通年の相談件数を順に示すと、179件、195件、325件、423件、447件、554件、618件と推移し、そして2016年度が644件であった。つまり2017年度は、2009年度以来、ずっと右肩上がりであり続けていた相談件数が初めて減少したことになる。しかし減少といっても前年比2パーセント程度であって、ほぼ横ばいと表現されるべき数字であろう。とはいえ、伸びなかったのは事実であるから、事業としては次年度に向けて、何らかの新たな工夫があってもよい時期を迎えているのかとも思われる。なお、

秋学期が春学期に比べて相談件数が大幅に減るといのは、近年共通の特徴であり、2016年度だと春学期が410件なのに対し、秋学期は234件であった。正味3分以上の「本格的相談件数」に限って言えば、2016年度が通年で123件なのに対し、2017年度は126件となり、右肩上がりではここまでは続いている。

学習相談員が企画運営する催事も新入生歓迎イベントなどいくつか行われたが、近年の中では少ないほうであり、この面においても課題を残している。（片山杜秀）

KEIO UNIVERSITY 2017, Autumn

# 学習相談

Study Advice 2017, Autumn

学習相談って何？

レポートやプレゼンなどのノウハウを知る学部生、院生が学生日線で相談に乗ります！

何を聞けばいいの？

テーマってどう決めるの？  
引用はどう書くの？  
書評って何？  
いいプレゼンを作るには？  
大学のノートってどうとるの？  
締め切りまで時間がない、etc


勉強に関する悩みならなんでも受け付けます！

利用方法は？

日吉メディアセンターHPから予約フォームがあります。  
<http://www.hc.lib.keio.ac.jp/studyskills/consultation.html>

予約なしの場合でも、デスクまでお越しいただければ対応いたします。

お気軽にお尋ね下さいね！




あなたの疑問、解決します。

<活動期間>  
10月2日（月）～1月19日（金）

<活動時間>  
月～金 13:00～18:00

<場所> 日吉図書館1F  
スタディサポート

<共催> 教養研究センター・日吉メディアセンター・日吉学生部



Twitter: @keiogakushusoud



## 5 教員サポート

2017年度の教員サポートは5月31日、前回に引き続き大岡真希子氏を講師としてお迎えし、開催された。大岡氏は2008年以来、日吉、信濃町、三田の各キャンパスの学生相談室、ならびにストレスマネジメント室において学生、教員のカウンセリングを担当されている。今回はまた、日吉学生相談室カウンセラーである中村麻里子氏にもご登壇いただいた。

大岡氏の講演は「学生相談事始め—学生理解と一次対応のために」と題され、教職員から見て〈気がかりな学生〉がいた際に、どのような対応をとるべきかが実践に役だつよう論じられた。異変への気づき、学生から話を聞くときの注意点（場所、手段）、守秘義務といった基礎的な知識に加え、場合によっては専門機関、保護者、学生相談室といかに連携して問題を解決すべきかが具体的に示された。続いて、相談室を実際に訪れた学生の案件が紹介され、対応の段取りをよりよくイメージすることができた。その後、中村氏より、相談室の組織、相談内容、来訪者の内訳などのデータ提示があり、それらもきわめて有益な情報であった。

今回の教員サポートはとりわけ新任教職員の参加を促すため、例年と異なり開催日を5月に設定した。前回から日が浅かったにもかかわらず、実に周到な準備をしてくださった大岡氏、中村氏に深く感謝を申しあげたい。おかげで十余名の参加者に恵まれ、講演後の質疑応答も活発におこなわれた。しかしながら日吉全体の教職員数からするとごく少数の参加であることは否めない。これを踏まえ、教養研究センター主催による教員サポートは今回をもって一度休止とすることをここに報告し、その理由と今後の展望を記しておきたい。

教員サポートにおける講演の内容は上記のとおり、未成年を含む若い世代と日常的に接している大学教職員にとってきわめて重要であり、そればかりか、昨今、学生が抱える問題の多様化に鑑み、全教職員が周知しておくべきこととしても過言ではない。同様に、学生相談室の存在や役割を正しく認知している教職員は決して多くないように思われる。にもかかわらず管見では、この種のレクチャーは本企画、つまり日吉の一センター主催による自由参加型の催しとしておこなわれるに留まっている。また、教養研究センターが教員サポートを担ってきた経緯やその整合性も現在では曖昧になってしまった。こ

れを受け、小菅所長とともに関係部署と協議をした結果、本事業を主導する組織体の見直しをはかることが最善という結論に至った。

個人的には、現行の教員サポートに相当する講座を新任教職員全員が受けられるようなシステムを構築できないかと考えているが、実現には多くの困難が伴うだろう。その再始動に対して教養研究センターが協力を惜しまないことはもちろんであるが、全キャンパス的な取り組みが必須であるため、ご賛同いただける教職員、各部署の方々のご協力をこの場をお借りしてお願い申しあげたい。

(新島 進)





# 1 日吉行事企画委員会 (HAPP)

日吉行事企画委員会 (HAPP) は春学期に新入生歓迎行事を実施してきている。秋学期には、塾生および教職員から企画を募集し、審査を経て採択した催し物を主催・開催してきている。2017年度の新生歓迎行事は、8つの企画がスケジュールされ実施された。毎年恒例となっている、舞踏の公演、塾名誉教授や著名者による講演会、塾長との交流を目的の一つとしている「塾長と日吉の森を歩こう」、複数回の演奏会を含む「日吉音楽祭」に加え、昨年に引き続き、日吉メディアセンターの中でコンサートが2回催された。また、経済学部において、すべての授業が英語で開講されているPEARLが2016年度秋学期より始まり、これにともない、ある程度まとまった数の9月入学の新入生が日吉キャンパスに存在することとなり、これに対応する形で、秋に期に行われる行事の数を増やし、また、日本語を理解しない学生にも対応できるイベントを行うことになった。新入生歓迎行事と位置付けられた企画の一覧は以下となる。

2017年度秋学期において日吉行事企画委員会は、春学期中に公募、採択を決定した企画の実行を核とした活動を展開した。今年度採択された公募企画は、教員企画が2件であった。これらは、10月13日行われた、薩摩琵琶についての講演および演奏会である、〈ATSUMORI～薩摩琵琶正派が描く武士の生き様～〉と、やはり同時期に催された、国連UNHCR難民映画祭の学校パートナーズとして慶應が初参加したイベントとなった、〈難民映画祭@慶應〉であった。後者は、10日間にわたるパネル展示、国連UNHCR協会理事長滝澤三郎氏による講演、そして《シリアに生まれて》と題された映画の上映で構成された。どちらの企画も、地域住民を含むたくさんの来場者を見ました。HAPPの活動が、日吉キャンパスを開かれた大学にしていくということに確実に貢献していることが確認できた。(石井 明)



5月16日

主催：慶應義塾大学教養研究センター-日吉行事企画委員会 (HAPP)

# 新入生歓迎

## ～体育科目紹介と筋肉診断～

新入生の皆さん、おはようございます。皆さんは、大学生活のスタート地点に立っています。大学生活は、新しい出会いと挑戦の連続です。体育科目は、心身の健康を維持し、自己実現の基盤を築くために不可欠な学びです。本学では、最新の測定機器を用いた筋肉診断を行い、皆さんの身体能力を把握し、適切な指導を行います。また、体育科目の履修状況や、大学生活での過ごし方についても、先輩からアドバイスをいただきます。

**開催日時**：2017年5月18日(木) 13:00～14:30  
5月25日(木) 14:00～15:30  
6月1日(木) 15:00～16:30

**対象**：新入生

**参加費**：無料

**会場**：体育館

**お問い合わせ**：HAPP 事務局 (TEL: 045-556-1111)

二〇一七年十月十三日(金)

# ATSUMORI

## 薩摩琵琶正派が描く 武士の生き様

薩摩琵琶正派の演奏を聴き、その歴史や文化について学びます。また、薩摩琵琶の演奏体験も行う予定です。

**日時**：平成29年10月13日(金) 18:15開演、18:30開演

**会場**：慶應義塾大学日吉キャンパス 本日吉イベントスペース

**料金**：前席 1,000円、後席 500円、学生 500円

**お問い合わせ**：HAPP 事務局 (TEL: 045-556-1111)

世界で人気を持つ  
浮世絵師 歌川国芳。時空を超え魅惑の力に迫ります!

# 国芳の魅力

## その豊かな画型

浮世絵師 歌川国芳の魅力を、その豊かな画型を通じて紹介します。また、国芳の作品を鑑賞し、その魅力について学びます。

**開催日時**：2017年10月7日(土) 15:00～16:30(開演 14:30)

**会場**：慶應義塾大学日吉キャンパス 本日吉イベントスペース

**お問い合わせ**：HAPP 事務局 (TEL: 045-556-1111)

# 難民映画祭@慶應

10月10日(火)～20日(金)

難民映画祭 大学日吉キャンパス実行委員会

きっと、0から1になる  
そんな映画祭。

**1** 10月10日(火) 18:00～20:00 特別上映会「難民映画祭」

**2** 10月11日(水) 18:00～20:00 特別上映会「難民映画祭」

**3** 10月12日(木) 18:00～20:00 特別上映会「難民映画祭」

**4** 10月13日(金) 18:00～20:00 特別上映会「難民映画祭」

**5** 10月14日(土) 18:00～20:00 特別上映会「難民映画祭」

**6** 10月15日(日) 18:00～20:00 特別上映会「難民映画祭」

**7** 10月16日(月) 18:00～20:00 特別上映会「難民映画祭」

**8** 10月17日(火) 18:00～20:00 特別上映会「難民映画祭」

**9** 10月18日(水) 18:00～20:00 特別上映会「難民映画祭」

**10** 10月19日(木) 18:00～20:00 特別上映会「難民映画祭」

**11** 10月20日(金) 18:00～20:00 特別上映会「難民映画祭」

バロック・ヴァイオリンで辿る

# マリーニの軌跡

ピアジョ・マリーニ作品1 出版400年記念演奏会

慶應義塾大学音楽部・ヴァイオリン・アンサンブル

指揮者：中野 浩二

**日時**：2017年7月8日(日) 14時開演

**会場**：藤原洋記念ホール

**料金**：前席 1,000円、後席 500円、学生 500円

**お問い合わせ**：HAPP 事務局 (TEL: 045-556-1111)

2017年度 HAPP 新入生歓迎行事

No.	企画名	日程
1	マハトマ・ガンジーの変革型リーダーシップと現代世界	4月17日(月)
2	江戸の伝統文化—歌舞伎芝居の今昔と、現代におけるその意味	4月22日(土)
3	異端のすゝめ～真の一流になるために～	5月15日(月)
4	ライブラリオンコンサート in 日吉 —図書館がコンサートホールになる2日間—	5月16日(火)・23日(火)
5	塾長と日吉の森を歩こう	5月20日(土)
6	体育科目紹介と筋肉診断	5月18日(木)・25日(木)・6月1日(木)
7	小林嵯峨舞踏公演「孵化する」	6月2日(金)
8	日吉音楽祭 2017	7月8日(土)・10月7日(土)
9	国芳の魅力—講演とミニ展示	7月28日(金)～10月31日(火)
10	英語で語る茶道の魅力—講演とワークショップ	10月28日(土)

2017年度 HAPP 公募企画

No.	企画名	日程
1	ATSUMORI～薩摩琵琶正派が描く武士の生き様～	10月13日(金)
2	難民映画祭@慶應	パネル展示10月10日～20日、講演会10月13日(金)、特別上映会10月20日(金)

## 2 日吉キャンパス公開講座

2017年度の日吉キャンパス公開講座を、10月7日～12月9日の日程で開催した。

2017年が国連の「開発のための持続可能な観光の国際年」ということもあり、今回は「観光と開発」をテーマに、観光について、またそれに伴う開発について、塾内外の講師の方に様々な内容で講義をお願いした。なお、テーマの設定にあたっては、5月9日に日吉キャンパス公開講座運営委員会を開催し、委員長の提示した素案を元に委員全体で検討し、正式タイトルおよび講師候補者を決定する、というプロセスを取った。開催に際して配付した宣伝文は以下の通りである（原文通りとするため、以下の部分のみ「です・ます調」で記しておく）。

観光は、娯楽や保養などの慰楽的効果をもたらすだけでなく、教養を高め、人々の相互理解を促進し、現地での雇用を創出する性質を持っています。また、観光を可能にするためには、施設や交通などを整備する必要があり、開発とは表裏一体の関係にあります。逆に言えば、開発は観光に繋がります。宇宙開発も、いずれは宇宙観光へと展開して行くことでしょう。しかし一方、行き過ぎた開発は自然環境の破壊や、文化の歪曲を生むこともあります。2017年は、国連によって定められた「開発のための持続可能な観光の国際年」でもあります。本講座では、「観光と開発」をテーマに、様々な分野から検討を行います。

本講座は、理論的な部分では、観光学や環境経済学、コミュニティデザイン論、スポーツツーリズムなどの分野からの講義があり、観光を地域作りに生かす議論や、アウトドア活動についての議論などが行われた。また特定の時代や国・地域を中心とした講義では、近代ドイツや中世ローマ、19世紀のグランドキャニオン、中国の宗教的聖地、「地元」横浜の崎陽軒やペルーの和食、ロシア土産のマトリョーシカ、さらには南極や火星などが取り上げられ、大変にバラエティに富んだものとなった。具体的な実施日・タイトル・講師は以下の通りである。

### 10月7日

- 3時限 「教養としての《旅》」  
糸川麻里生（文学部教授）
- 4時限 「観光と地域づくり」  
飯盛義徳（総合政策学部教授）

### 10月21日

- 3時限 「アウトドア活動と環境保護は両立するか」  
野口和行（体育研究所准教授）
- 4時限 「中国の聖地巡礼と開発」  
山下一夫（理工学部准教授）

### 10月28日

- 3時限 「教皇ニコラウス5世時代の聖年（1450年）におけるローマ」  
荒木文果（理工学部専任講師）
- 4時限 「南極の自然」  
鈴木 忠（医学部准教授）

### 11月11日

- 3時限 「環境と開発」  
細田衛士（経済学部教授）
- 4時限 「産業と観光資源——産業観光・産業遺産を中心に」  
種田 明（跡見学園女子大学観光コミュニティ学部教授）

### 11月18日

- 3時限 「観光とコミュニティデザイン」  
山崎 亮（東北芸術工科大学教授）

### 観光と開発

2017年  
10月7日(土)  
12月9日(土)

観光は、娯楽や保養などの慰楽的効果をもたらすだけでなく、教養を高め、人々の相互理解を促進し、現地での雇用を創出する性質を持っています。また、観光を可能にするためには、施設や交通などを整備する必要があり、開発とは表裏一体の関係にあります。逆に言えば、開発は観光に繋がります。宇宙開発も、いずれは宇宙観光へと展開して行くことでしょう。しかし一方、行き過ぎた開発は自然環境の破壊や、文化の歪曲を生むこともあります。2017年は、国連によって定められた「開発のための持続可能な観光の国際年」でもあります。本講座では、「観光と開発」をテーマに、様々な分野から検討を行います。

講座内容	
① 3時限 (13:00~14:30)	② 4時限 (14:45~16:15)
10-07 観光と地域づくり	飯盛義徳 総合政策学部教授
10-21 中国の聖地巡礼と開発	山下一夫 理工学部准教授
10-28 教皇ニコラウス5世時代の聖年(1450年)におけるローマ	荒木文果 理工学部専任講師
11-11 産業と観光資源——産業観光・産業遺産を中心に	種田 明 跡見学園女子大学観光コミュニティ学部教授
11-18 観光とコミュニティデザイン	山崎 亮 東北芸術工科大学教授
11-25 環境と開発	細田衛士 経済学部教授
12-09 南極の自然	鈴木 忠 医学部准教授

**募集要項**

募集対象：大学生以上  
 募集期間：10月10日(火)～10月15日(日)  
 申込締切：2017年10月10日(火)18時(当日必着)  
 定員：各時限10名程度  
 申込方法：募集要項の「申し込み」欄にてお申し込みください。お申し込みは、必ず「申し込み」欄に「申し込み」欄に記入してください。お申し込みは、必ず「申し込み」欄に記入してください。お申し込みは、必ず「申し込み」欄に記入してください。

●お問い合わせ先  
 慶應義塾大学教養研究センター  
 日吉キャンパス公開講座事務局（慶應義塾大学日吉キャンパス）  
 〒245-0292 神奈川県横浜市日吉4-1-3  
 TEL: 045-355-3111 FAX: 045-355-3112  
 E-MAIL: kyoiku@kyoritsu.ac.jp

- 4 時限 「スポーツビジネスと観光—欧州サッカーにおける先進事例」  
吉池 淳（ラグールドールスポーツシニアディレクター）

### 11月25日

- 3 時限 「横浜と崎陽軒」  
野並直文（株式会社崎陽軒代表取締役社長）
- 4 時限 「ロシアみあげマトリョーシカ—その誕生と変遷をめぐって」  
熊野谷葉子（法学部准教授）



荒木文果氏

### 12月2日

- 3 時限 「『食』の先進国を目指して—ペルー独立200年と Mistura」  
柳田利夫（文学部教授）
- 4 時限 「スポーツ都市戦略—スポーツツーリズムによる地方創生」  
原田宗彦（早稲田大学スポーツ科学学術院教授）



鈴木忠氏

### 12月9日

- 3 時限 「月・火星における居住の可能性を探る」  
新井真由美（NPO 法人日本火星協会理事、生態工学会理事、筑波大学非常勤講師）
- 4 時限 「観光事業家フレッド・ハービーの遺産—グランドキャニオン、サンタフェ、先住インディアン」  
鈴木 透（法学部教授）



マトリョーシカの展示（11月25日）

なお、当初は10月28日に原田宗彦君の講義を、12月2日に鈴木忠君の講義を実施する予定であったが、原田君のご家族の都合で急遽両者の日程を入れ換えることとなった。対外的にすでに告知した日程とは異なる実施となったが、この種の企画ではどうしても避けられないことであり、受講者から特にクレームの類が出ることは無かった。

観光自体は身近な行為であっても、これを開発の問題とセットで客観的に捉え直し、そこから講師の方々の専門に分け入っていくという内容に、受講者は大いに知的好奇心を刺激されたようである。大学の研究の一般への還元という点でも、今回の公開講座は大きな成功を収めたといえるだろう。

（山下一夫）



講座最終日（小菅隼人教養研究センター所長）



## 3 居場所「カドベヤで過ごす火曜日」

2017年で石川町の寿地区近隣にできた居場所「カドベヤ」は設立7年目を迎えた。また、火曜日ごとにそこで開催される居場所「カドベヤで過ごす火曜日」も6月で創設7年目を迎えることになった。2017年はこれまでの「アート」と「コミュニティ作り」を基にした活動を振り返り、これからの活動につなげるためのいくつかのイベントを開催した。一つは8月15日の（火曜日）に社会学科の岡原正幸ゼミの学生たちが主体となって開催した「寿 ACTION! 寿に集まれ!」で、寿地区を中心とした住民たちと学生との交流イベントを実施した。二番目は8月の（最終火曜日）、8月29日に開催した「カドベヤの夏祭り」である。今まで火曜日のカドベヤで開催してきた表現ワークショップから生み出された数々の出し物を、演芸会方式で見せることで、成果の発表を行うのみならず、カドベヤ参加者の作曲による歌を使って参加者全員でオリジナルの盆踊りを最後に踊った。こちらのイベントも慶應義塾大学の学生たちの協力を得て開催した。

これらの実践を理論の面から見るために、11月29日に開催したのが「多様な人々をつなぐコミュニティとアート」と題したシンポジウムである。異なるバックグラウンドを持つ人々を、アートを使ってつなげることで、コミュニティの再生・創設につなげる試みは、イギリスを中心として世界的な広がりを見せている。このシンポジウムでは、多世代交流のためのコミュニティ・ダンスの第一人者であるセシリア・マクファーレン氏をお招きし、3部に分けてのシンポジウムとワークショップを行った。まず第一部はレクチャー編である。ここではカドベヤでの活動と、そこでの芸術およびコミュニティ創設の意義と関係を横山千晶（居場所「カドベヤで過ごす火曜日」代表）が話し、イギリスのコミュニティ・ダンスの歴史と現状を舞踊研究家の稲田奈緒美氏（桜美林大学）が講義した。第二部はセシリア・マクファーレン氏、稲田氏、横山によるシンポジウムで、コミュニティ・アートの意義と将来性を参加者とともに話し合った。第三部ではマクファーレン氏によるワークショップを行い、どのように体を使って人々がつながっていきけるのかと言う課題を、実践を通して体感した。当日の参加者は30名で、障がいのある方・ない方、コミュニティ・アートにかかわっている方とそうでない方とさまざまな人々が集まった。ワークショップのあとは実際の話し合いの

場が再び持たれ、実践を通しての疑問や気づきについて積極的な意見交換が行われた。

これらのイベントやシンポジウムを経て、2018年1月13日の（土曜日）には、「火曜日のカドベヤを土曜日に覗く」と題して、参加者全員で火曜日のカドベヤの「日常」を参加型パフォーマンスとして楽しむと言うイベントを開催した。1月13日のイベントは、これまでカドベヤにかかわってくれたアーティストたちの協力を得て、さまざまな表現ワークショップをその場で行い、「カレーでアート」など、皆で食することも創造的な行為であるとする火曜日のカドベヤの信条を体感するイベントとなった。イベントのあとは、カドベヤメンバーと参加者の話し合いの場を作り、ここでの意見交換は、2018年度からのカドベヤの活動に生かされるのみならず、そこで生まれた他団体との関係性が今後のさらに広い「アートとコミュニティ」の考察に生かされていくことが期待される。

（横山千晶）

生きることは「アート」だ  
火曜日のカドベヤを土曜日に覗く

火曜日ごとにその扉を開いて何かやっているカドベヤ、でもどこってどんな場所？  
いつもは火曜日の夕方に閉く居場所を土曜日の午後1時に開いて覗いてもらいます。  
火曜日のカドベヤを火曜日のメンバーでいつもの火曜日らしく過ごす土曜日。  
そんな様子を皆さんに楽しんでもらいながら、一緒に踊ったり食べたり、歌ったりする  
イベント。案内人はいつものカドベヤのメンバーと支えてくれるアーティストたちです。  
持ってくるものは何もなし。気軽に立ち寄ってください。

居場所「カドベヤで過ごす火曜日」とは？  
2010年6月に開いた町の「居場所」。もう一つのみんなの「部屋」として、17時半からの「足湯カフェ」、19時からの「ストレッチ(ワークショップ)」、20時からの「ゆづめし」というメニュー毎週火曜日に開いています。どんな人でもウェルカムです。  
体を動かして、一緒に食べることで人と出会う場所。それが火曜日のカドベヤです。  
心と体のストレッチ、共に食べることで、一緒に作ることで、その一つひとつが「アート」だ！  
それが、カドベヤのモットーです。

日時 2018年1月13日(土)14時半開場 15時開演 無料  
場所 居場所「カドベヤ」(横浜市中区石川町5-209-3 1階)

予約はいりませんが会場が  
それほど広くないため満員  
の時は入場をお断りする場  
合もあります。あらかじめご  
了承ください。

●問い合わせ先: 横山千晶 chacky@kelo.jp  
火曜日のカドベヤについて、詳しくは、「カドベヤのブログ」で検索してください

主催 慶應義塾大学教養研究センター  
居場所「カドベヤで過ごす火曜日」運営委員会  
助成 横浜市地域文化サポート事業 ヨコハマアートサイト2017

ヨコハマ  
アートサイト

## 1 慶應義塾大学教養研究センター規程

平成14年7月2日制定

改正 平成17年6月3日 平成18年5月9日  
 平成20年5月1日 平成20年11月4日  
 平成21年12月15日 平成23年3月29日  
 平成26年12月5日

(設置)

第1条 慶應義塾大学(以下「大学」という。)に、慶應義塾大学教養研究センター(Keio Research Center for the Liberal Arts。以下「センター」という。)を置く。

(目的)

第2条 センターは、多分野・多領域にまたがる内外の交流・連携に基づく教養研究活動を推進することで、知の継承と発展に貢献することを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1 教養研究を中心とした知の継承と拡大、発展に資する研究活動
- 2 教養研究活動に基づく学内外の交流活動の企画、支援
- 3 教養研究活動への助成および支援
- 4 教養研究活動状況の把握と情報の収集および発信
- 5 その他センターの目的達成のために必要な事業

(組織)

第4条 ① センターに次の教職員を置く。

- 1 所長
  - 2 副所長 若干名
  - 3 所員 若干名
  - 4 研究員 若干名
  - 5 事務長
  - 6 職員 若干名
- ② 所長は、センターを代表し、その業務を統括する。
- ③ 副所長は、所長を補佐し、所長に事故あるときはその職務を代行する。
- ④ 所員は、原則として兼担所員とし、センターの目的達成のために必要な研究および職務に従事する。
- ⑤ 研究員は、特任教員、研究員(有期)または兼任研究員とし、所長の指示に従い研究に従事する。

⑥ 国内および国外の大学、専門研究機関からの派遣研究者に関しては、別に訪問研究者を置くことができる。

⑦ 事務長は、センターの事務を統括する。

⑧ 職員は、事務長の指示により必要な職務を行う。(運営委員会)

第5条 ① センターに運営委員会を置く。

② 運営委員会は、次の者をもって構成する。

- 1 所長
- 2 副所長
- 3 事務長
- 4 大学各学部長
- 5 大学各学部日吉主任
- 6 日吉研究室運営委員長
- 7 日吉メディアセンター所長
- 8 日吉ITC所長
- 9 体育研究所長
- 10 外国語教育研究センター所長
- 11 自然科学研究教育センター所長
- 12 日吉キャンパス事務長
- 13 その他所長が必要と認めたる者

③ 委員の任期は、役職で選任された者はその在任期間とする。その他の者の任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

④ 運営委員会は所長が招集し、その議長となる。

⑤ 運営委員会は、次の事項を審議する。

- 1 センター運営の基本方針に関する事項
  - 2 センターの事業計画に関する事項
  - 3 研究プログラムに関する事項
  - 4 人事に関する事項
  - 5 予算・決算に関する事項
  - 6 コーディネート・オフィスに関する事項
  - 7 その他必要と認める事項
- (コーディネート・オフィス)

第6条 ① センターの事業活動を円滑かつ効率的に遂行するために、運営委員会の下にコーディネート・オフィスを置く。

② コーディネート・オフィスは、所長、副所長、事務長およびコーディネーター若干名をもって構成する。コーディネーターは、所長、副所長、事務長とともに、センターの事業を推進する。

③ コーディネート・オフィスは、必要に応じて委員会を置き、センターの事業活動の一部を付託す

ることができる。

(特別委員会)

第7条 運営委員会は、必要に応じて特別委員会を置き、第5条第5項に定める審議事項の一部について審議を付託することができる。

(教職員の任免)

第8条 ① センターの教職員等の任免は、次の各号による。

1 所長は、大学評議会の議を経て塾長が任命する。

2 副所長、所員および兼任研究員は、所長の推薦に基づき、運営委員会の議を経て塾長が任命する。

3 特任教員および研究員(有期)については、「任免規程(就)(昭和27年3月31日制定)」の定めるところによる。

4 訪問研究者については、「訪問学者に対する職位規程(昭和51年8月27日制定)」の定めるところによる。

5 事務長および職員については、「任免規程(就)(昭和27年3月31日制定)」の定めるところによる。

6 コーディネーターは、所員および義塾職員の中から、所長が推薦し、運営委員会が委嘱する。

② 所長、副所長およびコーディネーターの任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

③ 所員の任期は2年とし、重任は妨げない。

④ 兼任研究員の任期は、次条に定める研究プログラムの研究期間とする。

(研究プログラム)

第9条 ① センターに次の研究プログラムを置く。

1 基盤研究：専任教員が核となって展開する、教養研究を中心とした共同研究

2 一般研究：センターが必要と認めた個人研究または共同研究

3 特定研究：センターが企画、立案した研究

② 研究プログラムの企画・募集・選定・管理・統括等の詳細については、運営委員会で別に定める。

(契約)

第10条 ① 外部機関等との契約は、慶應義塾の諸規程等に則り行うものとする。

② 学内機関等との契約は、運営委員会の議を経て所長が行うものとする。

(経理)

第11条 ① センターの経理は、「慶應義塾経理規程(昭和46年2月15日制定)」の定めるところによる。

② センターの経費は、義塾の経費、委託研究資金、国または地方公共団体等からの補助金、寄附金およびその他の収入をもって充てるものとする。

③ 外部資金の取扱い等については、学術研究支援部の定めるところによる。

(規程の改廃)

第12条 この規程の改廃は、運営委員会の審議に基づき、大学評議会の議を経て塾長が決定する。

附 則

① この規程は、平成14年7月1日から施行する。

② この規程は、施行後3年を目途に見直すものとする。

附 則(平成17年6月3日)

この規程は、平成17年6月3日から施行する。

附 則(平成18年5月9日)

この規程は、平成18年5月9日から施行し、平成18年5月1日から適用する。

附 則(平成20年5月1日)

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則(平成20年11月4日)

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則(平成21年12月15日)

この規程は、平成21年10月1日から施行する。

附 則(平成23年3月29日)

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則(平成26年12月5日)

この規程は、平成26年4月1日から施行する。

## 2 運営委員会委員

2017年4月1日～2018年3月31日在籍者  
 第8期(2015年10月1日～2017年9月30日)  
 第9期(2017年10月1日～2019年9月30日)

## 教養研究センター担当常任理事

長谷山 彰(2017年5月27日まで)  
 鈴木 直樹(2017年5月28日から)

## 教養研究センター所長

小菅 隼人

## 教養研究センター副所長

片山 杜秀  
 高橋 宣也  
 新島 進

## 教養研究センター事務長

吉川 智江(2017年10月31日まで)  
 大古殿憲治(2017年11月1日から)

文学部長 松浦 良充

経済学部長 中村 慎助(2017年9月30日まで)  
 池田 幸弘(2017年10月1日から)

法学部長 岩谷 十郎

商学部長 榊原 研互

医学部長 岡野 栄之(2017年9月30日まで)  
 天谷 雅行(2017年10月1日から)

理工学部長 伊藤 公平

## 総合政策学部長

河添 健

## 環境情報学部長

村井 純(2017年9月30日まで)  
 濱田 庸子(2017年10月1日から)

## 看護医療学部長

小松 浩子

薬学部長 杉本 芳一(2017年9月30日まで)  
 金澤 秀子(2017年10月1日から)

## 文学部日吉主任

坂本 光

## 経済学部日吉主任

境 一三(2017年9月30日まで)  
 柏崎千佳子(2017年10月1日から)

## 法学部日吉主任

下村 裕(2017年9月30日まで)  
 奥田 暁代(2017年10月1日から)

## 商学部日吉主任

種村 和史

## 医学部日吉主任

南 就将(2017年9月30日まで)  
 井上 浩義(2017年10月1日から)

## 理工学部日吉主任

萩原 眞一

## 薬学部日吉主任

阿部 芳廣(2017年9月30日まで)  
 田村 悦臣(2017年10月1日から)

## 体育研究所所長

石手 靖

## 日吉メディアセンター所長

斎藤 太郎(2017年9月30日まで)  
 横山 千晶(2017年10月1日から)

## 外国語教育研究センター所長

七字 眞明

## 自然科学研究教育センター所長

金子 洋之

## 日吉研究室運営委員会委員長

朝吹 亮二(2017年9月30日まで)  
 不破 有理(2017年10月1日から)

## 日吉キャンパス事務長

栗谷 文治(2017年10月31日まで)  
 蠣崎 元章(2017年11月1日から)

## 日吉学生部事務長

黒田 修生(2017年10月31日まで)  
 千葉 徹(2017年11月1日から)

## 日吉メディアセンター事務長

長島 敏樹

## 日吉キャンパス事務センター課長

今村江里子(2017年5月31日まで)  
 川田 孝征(2017年6月1日から)

## 基盤研究(カリキュラム)座長

佐藤 望(2017年9月30日まで)

## 基盤研究(社会・地域連携)代表

羽田 功(2017年9月30日まで)

## 日吉行事企画委員会(HAPP)委員長

石井 明

## 日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長

山下 一夫



## 3 組織構成員

2017年4月1日～2018年3月31日

所員：199名（2018年3月31日現在）

所長：小菅隼人(理)

副所長：片山杜秀(法)

高橋宣也(文)

新島進(経)

コーディネーター：

下村裕(法・2017年9月30日まで)、

萩原眞一(理・2017年10月1日から)、

武藤浩史(法)、種村和史(商)、佐藤望(商)、

荒金直人(理・2017年10月1日から)、

羽田功(経)、長田進(経)、高山緑(理)、

鈴木晃仁(経)、不破有理(経)、徳永聡子(文)、

赤江雄一(文)、横山千晶(法)、前野隆司(SDM研究科)、

高田眞吾(理)、石井明(経)、山下一夫(理)、

栗谷文治(キャンパス事務長・2017年10月31日まで)、

嶋崎元章(キャンパス事務長・2017年11月1日から)、

吉川智江(教セ事務長)(2017年10月31日まで)、

大古殿憲治(教セ事務長)(2017年11月1日から)

広報担当：高橋宣也(文)

#### 日吉行事企画委員会 (HAPP)

委員長：石井明(経)

委員：高橋宣也(文)、大出敦(法)、佐藤望(商)、

竹内美佳子(商)、津田眞弓(経)、

小菅隼人(理)、小宮繁(理)、

杉山由希子(理・2017年11月30日まで)、

小林拓也(理・2017年12月1日から)、

石手靖(体研)、徳村光昭(保セ)、

栗谷文治(キャンパス事務長・2017年10月31日

まで)、

嶋崎元章(キャンパス事務長・2017年11月1日

から)、

川田孝征(運営サ)、難波陽平(運営サ)、

篠塚憲一(学生部)、

秋山慧(学生部・2017年12月31日まで)、

友田明文(学生部・2018年1月1日から)、

長島敏樹(日吉メディアセ)、

酒見佳世(日吉メディアセ・2017年10月31日まで)、

長野裕恵(日吉メディアセ・2017年11月1日から)、

鈴木都美子(教養セ)

#### 極東証券寄附講座運営委員会

委員長：小菅隼人(理)

委員：片山杜秀(法)、高橋宣也(文)、新島進(経)

#### 「生命の教養学」企画委員

委員長：赤江雄一(文・2017年9月30日まで)

荒金直人(理・2017年10月1日から)

委員：山下一夫(理・2017年9月30日まで)、

高桑和巳(理・2017年9月30日まで)、

鈴木晃仁(経・2017年9月30日まで)、

小野裕剛(法・2017年9月30日まで)、

村松憲(体育研究所・2017年9月30日まで)、

吉川智江(教セ事務長・2017年9月30日まで)、

下村裕(法・2017年10月1日から)、

伏見岳志(商・2017年10月1日から)、

西尾宇広(商・2017年10月1日から)、

高山緑(理・2017年10月1日から)、

沼尾恵(理・2017年10月1日から)、

松原輝彦(理・2017年10月1日から)

#### 龍角散寄附講座運営委員会

委員長：小菅隼人(理)

委員：片山杜秀(法)、高橋宣也(文)、

新島進(経)、佐藤望(商)

#### 日吉キャンパス公開講座運営委員会

委員長：山下一夫(理)

委員：小菅隼人(理)、石井明(経)、福澤利彦(商)、

寺沢和洋(医)、前野隆司(SDM研究科)、

佐々木玲子(体研)、高橋宣也(文)、

島田美和(法)、

栗谷文治(キャンパス事務長・2017年10月31日

まで)

嶋崎元章(キャンパス事務長・2017年11月1日

から)

#### 2017年度庄内セミナースタッフ

小菅隼人(理)、大出敦(法)、

高橋宣也(文)、中川真知子(経)

#### 庄内セミナー実行委員会

委員長：大出敦(法・2017年11月30日まで)

羽田功(経・2017年12月1日から)

委員：小菅隼人(理)、

高橋宣也(文・2017年11月30日まで)、

工藤多香子(経・2017年11月30日まで)、

伏見岳志(商・2017年11月30日まで)、

中川真知子(経・2017年11月30日まで)、

片山 杜秀(法・2017年12月1日から)、  
鈴木 亮子(経・2017年12月1日から)、  
森吉 直子(商・2017年12月1日から)、  
杉山有紀子(理・2017年12月1日から)

#### 日吉学運営委員会

小菅隼人(理)、片山杜秀(法)、高橋宣也(文)、  
新島 進(経)、不破有理(経)

#### 日吉学企画委員会

委員長：不破有理(経)

委員：小菅隼人(理)、片山杜秀(法)、高橋宣也(文)、  
安藤広道(文)、福山欣司(経)、長田 進(経)、  
長沖暁子(経)、大出 敦(法)、  
神武直彦(SDM研究科)、  
都倉武之(福澤研究セ)、  
阿久沢武史(塾高)、太田 弘(普通部)

#### 教養研究センター事務局

吉川智江(事務長・2017年10月31日まで)、  
大古殿憲治(事務長・2017年11月1日から)、  
鈴木都美子、池本晶子、傳 小史、大澤 綾

## 4 2017年度の主な活動記録

Date	Events
4	5日 教養研究センター設置科目全体ガイダンス 7～13日 クラス別ガイダンス 17日 HAPP企画「マハトマ・ガンジーの変革型リーダーシップと現代世界」 19日 第1回情報の教養学「増え続けるサイバー犯罪、サイバー攻撃からどのように身を守るか?!」 21日 第1回所長・副所長会議 22日 HAPP企画「江戸の伝統文化—歌舞伎芝居の今昔と、現代におけるその意味」 26日 読書会推進企画「晴読雨読」 ブルーノ・ラトゥール『科学論の实在—パンドラの希望』 を読む 第1回
5	10日 基盤研究「教養研究」講演会 no.1 「『オイディプス王』を上演する—古典と教養」 15日 HAPP企画「異端のすゝめ～真の一流になるために～」 16、23日 HAPP企画「ライブラリーコンサート in 日吉—図書館がコンサートホールになる2日間」 16日 ニュースレター 30号刊行 17日 第2回情報の教養学「著作権の必須知識を今日90分で身につける！」 18、25、6/1 HAPP企画「体育科目紹介と筋肉診断」 20日 HAPP企画「塾長と日吉の森を歩こう」 26日 第1回コーディネート・オフィス会議 31日 読書会推進企画「晴読雨読」 ブルーノ・ラトゥール『科学論の实在—パンドラの希望』 を読む 第2回 31日 教員サポート19 学生相談 事始め—学生理解と一次対応のために—
6	2日 HAPP企画「小林嵯峨舞踏公演「孵化する」」 3、4日 学会・ワークショップ等開催支援「日本演劇学会2017年度大会」 9日 庄内セミナー募集説明会 14日 第十九弾「研究の現場から」呉茂松 16日 第2回所長・副所長会議 21日 読書会推進企画「晴読雨読」 ブルーノ・ラトゥール『科学論の实在—パンドラの希望』 を読む 第3回 28日 第3回情報の教養学「個人情報漏洩とその対策」
7	8日 HAPP企画「日吉音楽祭2017」 8日 学会・ワークショップ等開催支援「全体主義と民主主義 クロード・ルフォール『民主主義の発明 全体主義の限界』邦訳出版記念シンポジウム」 28日～10/31 HAPP企画「国芳の魅力—講演と展示」 28日 第3回所長・副所長会議 31日 学習相談春学期反省会 31日 極東証券寄附講座 生命の教養学12「食べる」刊行
8	2日 読書会推進企画「晴読雨読」 ブルーノ・ラトゥール『科学論の实在—パンドラの希望』 を読む 第4回 2日 庄内セミナー参加者事前説明会 2日 第2回コーディネート・オフィス会議 10日 学会・ワークショップ等開催支援「日本地図学会 学術大会 地図学アウトリーチ ワークショップ」 18日 第3回コーディネート・オフィス会議 29日～9/1 第8回庄内セミナー 31日 2016年度活動報告書刊行
9	5日 第1回運営委員会 29日 第4回所長・副所長会議 30、10/7、10/14、11/3 実験授業 過去から未来を紡ぐ「日吉学」—キャンパスの古層を探求・体感した縄文編

Date	Events				
10	7日 7日 7日～12/9 11日	HAPP企画「日吉音楽祭2017」 学会・ワークショップ等開催支援「デリダと死刑を考える」 日吉キャンパス公開講座「観光と開発」〈全8回16コマ〉 読書会推進企画「晴読雨読」ブルーノ・ラトゥール『科学論の实在—パンドラの希望』を読む 第5回			
	18日 22日 25日	教養研究センター主催読書会「晴読雨読」田辺 元『懺悔道としての哲学』を読む 第1弾 学会・ワークショップ等開催支援「ジュール・ヴェルヌ再発見—作家と大衆作家」 第4回情報の教養学「初音ミクの影響力 バーチャルとリアル、ユーザーとファン達との10年、その先へ」			
	27日 28日 28日 31日	第5回所長・副所長会議 教養研究センター基盤研究「教養研究」シンポジウムno.1「日本の近現代を“教養”から考える」 HAPP企画「英語で語る茶道の魅力—講演とワークショップ」 CLA-アーカイブズ34「学生相談 事始め—学生理解と一次対応のために—」刊行			
	11	1日 8日 15日 21日 22日 24日 29日 29日	読書会推進企画「晴読雨読」ブルーノ・ラトゥール『科学論の实在—パンドラの希望』を読む 第6回 第二十弾「研究の現場から」井口篤 第5回情報の教養学「完全自動運転 コンピュータはヒトを超えるか」 第6回所長・副所長会議 第4回コーディネート・オフィス会議 第2回運営委員会 教養研究センター主催読書会「晴読雨読」田辺 元『懺悔道としての哲学』を読む 第2弾 学会・ワークショップ等開催支援「多様な人々をつなぐコミュニティとアート—シンポジウム&ワークショップ」		
		30日 30日	ニューズレター31号刊行 庄内セミナー報告書刊行		
		12	4日 6日	第5回コーディネート・オフィス会議 第6回情報の教養学「超スマート社会における身体情報学 視線や表情の理解と共有を目指して」	
			12日 13日	基盤研究「教養研究」講演会no.2「教養と演劇：現代人にとって、演劇は教養になるか」 学びの連携プロジェクト2017年度第1回公開セミナー「効果的な論文指導を目指して—英語論文編」	
			13日 20日 27日 27日	読書会推進企画「晴読雨読」ブルーノ・ラトゥール『科学論の实在—パンドラの希望』を読む 第7回 第二十一弾「研究の現場から」西尾宇広 慶應義塾大学コレギウム・ムジクム演奏会（合唱とオーケストラ音楽） 教養研究センター主催読書会「晴読雨読」田辺 元『懺悔道としての哲学』を読む 第3弾	
			1	13日 17日	慶應義塾大学コレギウム・ムジクム古楽アカデミー・オーケストラ演奏会 読書会推進企画「晴読雨読」ブルーノ・ラトゥール『科学論の实在—パンドラの希望』を読む 第8回
				24日 24日	第7回所長・副所長会議 教養研究センター主催読書会「晴読雨読」田辺 元『懺悔道としての哲学』を読む 第4弾
2				1日 6日 7日 28日	学習相談秋学期反省会 慶應義塾大学コレギウム・ムジクム ヘンデル《メサイア》全曲演奏会 極東証券寄附講座アカデミック・スキルズ プレゼンテーション・コンペティション 第6回コーディネート・オフィス会議
	3	3、4日 6日 28日 28日 30日	学会・ワークショップ等開催支援「ヒトと動物の関係学会 24回学術大会」 第3回運営委員会 教養研究センター主催読書会「晴読雨読」田辺 元『懺悔道としての哲学』を読む 第5弾 2018年度学習相談キックオフミーティング 読書会推進企画「晴読雨読」ブルーノ・ラトゥール『科学論の实在—パンドラの希望』を読む 第9回		
		31日 31日 31日 31日 31日 31日	教養研究センター選書18『ジョン・ラスキンの労働者教育—「見る力」の美学』（横山千晶）刊行 2017年度アカデミック・スキルズ学生論文集刊行 基盤研究「教養研究」講演記録集刊行（PDF版） 教養研究センター主催読書会「晴読雨読」報告書「エマニュエル・レヴィナス著『倫理と無限』フィリップ・ネモとの対話』を読む」刊行 CLA-アーカイブズ35「効果的な論文指導を目指して—日本語論文編/英語論文編」刊行		



---

慶應義塾大学教養研究センター  
2017年度 活動報告書

---

2018年8月31日発行  
編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター  
代表者 小菅隼人

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL 045-563-1111(代表)

Email [lib-arts@adst.keio.ac.jp](mailto:lib-arts@adst.keio.ac.jp)

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

編集・制作 慶應義塾大学出版会株式会社

印刷・製本 株式会社太平印刷社

---











**慶應義塾大学教養研究センター**

Keio Research Center for the Liberal Arts